
とある不確の超重力崩壊【ブラックホール】

ignited

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不確の超重力崩壊【ブラックホール】

【Nコード】

N0467U

【作者名】

ignited

【あらすじ】

学園都市。二三〇万人の頂点、レベル5。その超能力の領域を目指す高校生、シモミ・リュウゼン霜見竜潜はある日、とある事件に巻き込まれたことをきっかけに様々な騒動に遭遇する事となる……。オリ主がドタバタと活躍するサスペンスフルSF系コメディメイン物語です。

第1話 不確定性「アンステイブル」

「あ」

七月十九日。

時刻はほどよく夕方。

頭上に放り投げたリングが朱の混じる日差しに包まれるのを視界に、霜見竜潜シモミ・リュウセンは無意識の声を上げた。

リングは加速の頂点で重力に引かれ、真っ直ぐにこちらへ向かって落ちてくる。

まっとうな物理現象だった。

大昔にニュートン先生が発見してくれた万有引力は常識と非常識の境がひどく曖昧なここ学園都市においてもまだまだ現役続投中で、途中で次元の狭間に消えて無く事もなく、落下というこの世で最も単純な物理現象の一つを霜見の頭上で忠実に再現してくれていた。

「つと」

だから。

なんて、いちいち理由が必要な行為でもなかったが、落ちてきたリングを霜見は左手で掴み取った。

高機能アスファルトと万有引力にリングの味を吟味するような風情があるとも思えない。

スーパールの特売により一個40円の破格値で手に入れたリングとはいえ、勿体ないという概念は霜見の中にだってあるのだ。

「はあ。つたく」

我ながらアホ臭い思考回路をしているなとは思いつつ。

霜見は皮ごとりんごに齧りついた。

立ち食い歩き食いが下品で褒められたような行いではないという知識くらいは十七年間の人生で学習済みなので、わざわざ周囲の視線に何かしらの感情を抱く事は無い。自覚はある、なんてのは知り合いの口癖だが。

「アンステイフル
不確定性、ねえ。その通りだからムカツクよな」

ほどよく歯ごたえのある甘い果実を租借し、考えるのは本日どこぞの研究機関で測定した己の能力についてだった。

重力波の測定実験。

そのものずばり。霜見竜潜の能力は重力を自在に操る事であり、今日は月に数回ある定期検測の日であった。

朝から体力測定をした後、昼食がてら担当研究員と心理テストのような会話をし、午後は能力測定。前は宇宙服のような物を着せられての水中実験で、今日はとにかく真っ白な部屋での歩行実験だった。

良好な結果だったらしい。

だったらしい、というのはその結果に伴う評価が著しくなかったからだ。

「測定結果だけなら優秀なんっすけどね」

今どき珍しいビン底のような眼鏡をかけた研究員の言葉が脳裏に浮かんでくる。

その後に続く、惜しいっすわ、というのはその研究員の口癖か慰めか嫌味のどれかではあるが、だが実際に惜しくもレベルアップの機会を逸し続けている霜見には反論に値する言葉は無いのが事実だった。

アンステイブル
不確定性。

字面通り、霜見の能力には確定性というものが欠けている。

それはどういう事なのかと言うと、ある日唐突に自身の能力の一切が使えなくなる、といった具合の症状が出る——つまり不安定なのだ。

原理は不明。

何がきっかけで、何が原因で、そして何が起きているのか、それらはまったくの不明瞭。

取り分け、街中は統計的に能力不全の起こる確率が高い。

街中という場所は、日常生活という概念と等符号で結ばれる仲にある。

要するにだ。霜見の能力は普通に生きる生活の上で非常に揺らぎやすいと、そういう事だった。

アンステイブル
不確定性とは、そのような能力の状態を指して呼ばれる、不合格印のようなものだ。

不名誉な事極まりないと思う霜見だが、しかし一方で仕方がないとも思っていた。

その気持ちが能力の欠陥に対する理解なのか諦めなのかは結論付けられないが、しかし脆弱性のある能力に評価を求める方が間違いのだと、そう自分に言い聞かせる事はやぶさかではない。それが能力の強制シャットダウンなどという致命的すぎる弱点であるならばさらに当然の事、欠陥品に値段など着く筈も無いと。

想像してみればいい。飛行中に壊れる事が約束されている航空機に金を払う者などこの世界にはたして居るものだろうか。

「はあ。憂鬱だ」

陰鬱とも言える。

重力に従って手の平に落ちたリングを見つめて、霜見は鬱々とし

た溜息を吐いた。

アンステイブル
不確定性。

霜見の能力下では、霜見の許可がある限り、あらゆる物体は重力の束縛から逃れることが出来る。

下に落ちるといふまっとうな物理現象が霜見の周囲で健在であるという事は、まあつまりはそういう事だった。今がまさに、烙印を押された状態なのだと。

沈鬱な気分のまま、霜見はリングをもう一齧り。と、

「明日っから夏休みかー。よし、カミジョウさん無駄食いしちゃうぞー」

という能天気そうな声が背後から。

振り向くと、通りの角に消えていく学生服が見えた。ハードワックスでもきめているのか、やけに飛び跳ねたツンツンの後ろ頭が印象に残る。

—— 愉快的奴も居るもんだ。その幸福を分けてもらいたいねえ、はあ。

溜息は多い方では無いが。

今日、というか能力測定のある日だけは特別だった。

自身の成長の無さと停滞っぷりをまざまざと突きつけられる日は否が応にも心が重くなる。能力が使えない時に何かを重く出来るというのも面白い話だな。…… 笑えよベジータ。

「…… 帰ろ」

重力に引かれる肩だけが、ひたすら重く感じる夕暮れ時。

足取りすらも重くなってきたように感じて、霜見はもう一度、深いため息をついた。

●
●
●

七月二十日。

夏休みの初日、すっかり昇りきった太陽が放つビーム兵器さながらの直射日光を浴びた学生寮の一室は、まるでサウナのように蒸し上げられていた。

炉心融解手前にまで近づいた部屋の窓際で目覚めを得た霜見は、快適とはいえない寝起きの身体を起こして、汗ばんだシャツをまっすは着替えようとパジャマ代わりのシャツを脱いだ。と共にシャワーでも浴びて汗を落とそうかと立ち上がる。

「っと、クーラー入れとかなきゃな」

はたして冷房という文明の快適性が人体にいかほどの悪影響を及ぼすのか。

そんな題材の論文もきつと探せばあるのだろうが、取り分け興味の無い霜見はまだそんなものに巡り合った事は無い。

とにかく今の霜見の願いはこれ以上のソーレイ照射とそれに伴う部屋の灼熱化を止める事にあり、前者の方は今日も元気な太陽の核融合反応を止める必要があるので無理として、一般的に普及している後者の選択を取る事に霜見は一切の異議など無かった。

そんな訳で。

霜見は二メートルほど離れたテーブルの上、クーラー用リモコンに向けて左手を軽く開いた。

あらゆる物体は重力の働く方向に対して上下が定められる。地球という重力源に対して、下という方向を取るのが通常の物理現象であり、霜見の能力はその常識を文字通りにひっくり返す事が出来る。今の場合は、リモコンに掛る重力方向を自分の立つ方へと向ける。そうすると、リモコンは方向の変わった重力に引かれ、霜見の手元まで落ちて来る。それをキャッチし、赤い電源ボタンを押す。

「あれ？」

反応が無い。

常ならば、ピッ、という小さな電子音と共にクーラーが一次冷却を始める為に起動するのだが、どうもそのような気配が無い。

「どうした？電池切れか？」

リモコン裏の電池カバーを外し、電池の左右を入れ替えてみる。電化製品のリモコン程度の小電力機器ならばこれで一時的な復活を果たすのだが、

「あつれ？」

反応が無い。おかしい。

そう思つて霜見は戸棚から予備の電池を引つ張り出して交換、再度スイッチオン。

反応無し。

こうなつたら、と重力波を飛ばしてクーラー本体の電源ボタンを操作するが、これもまた反応無し。

——どういふ、事だ……？

クーラーが壊れたか？

馬鹿な、と霜見は思う。

昨夜の時点ではリモコンもクーラーも正常に稼働していた。数時間の睡眠の後にそれらがまとめて壊れるなど確率的に見てあり得るのか。

「っ、まさか！」

踵を返し、霜見が向かうのは玄関の方向。

靴箱の上に設置されたブレイカーを見て、霜見は愕然とした。

「ヒューズが、飛んで……」

ブレイカーが落ちていた。

少なくとも昨日の夜、霜見が就寝に着くまでは正常に電力供給は成されていた筈であり、とすると、原因は就寝してからの深夜にあるのだろうか。

季節柄、雷でも落ちたのかもしれない。怪しげな研究実験に日夜勤しんでいる学園都市だ、雲の上の雷サマが好みそうな集中帯電などいくらでもあると言うもの。二万人の電撃使いをクロージングする実験があると以前聞いたが、それだけの電源がうようよしければ雷の一つや二つ、落ちても不思議はないのだろうか。

「はあ……。昼までに電化製品のチェックしかねーとな……」

とはいえ、ヒューズがぶっ飛んでしまうほどの負荷がかかったのだから、もはや旧式の家電はほとんど使い物にならなくなっていると考えて間違いないだろう。

しなくてはいけない。

けど、結果はあまり見たくない。

無勉強で挑んだテストの結果を待つような懐かしい心境で、とりあえず、霜見はバスルームへと足を向けた。

第2話 突発性巻き込まれ症候群「トラブル・シンドローム」

学園都市。

科学技術研究や超能力開発機関が目白押しに揃った世界最大の科学都市では、昼夜を問わず能力の研究や実験開発が行われている。白衣をフル装備した研究員が安全だと主張する物ほど妙に胡散臭く見えてしまうのは霜見の疑り症が深いからか否か、恐らくはどちらも五分五分と言ったところではあるうがそれはさておいて。

最先端の科学を誇る都市はセキュリティも最先端だ。

今日びDNA照合のキーなど珍しくもなんと無い。警備には口ボットが使われる。監視網だって充実の24時間営業だ。

にも関わらず、学園都市は犯罪の発生件数が意外と多い。

日頃の実験でストレス溜まってんだろ？というのが霜見の唱える学説であるが、それを差し引いても突発性犯罪件数は多いと言わざるを得ないし、路地裏には武装無能力集団スキルアウトなどという物騒な集団が生息しているし、少数で動く武闘派能力者集団なるものも存在すると聞いている。

それらに対応する為、日夜訓練と鍛錬を欠かさない実直な警備員アンチスキルや、様々な能力者の揃う風紀委員など、優秀な治安維持組織もあるのだが、さて、脳内世紀末が到来してしまった人間にとってそれらの組織がどれ程の抑止力になるのだろうか。

なまじ能力開発でそれなりのチカラを手に入ってしまうと、人生を賭けた一発勝負的な計画にも大胆不敵に挑めるようになってしまふのが人間の単純な所であり――

「動くな。喋るな。命令には従って大人しくしていれば、怪我人は

出ねえから、ほら、さつさと金だよ、金。全額おろさせてもらおうか？」

今日もまた、そんな人間が元気に活動する強盗日和だったりするのである。

——え、アレ、マジ？強盗？もうすぐ完全下校時刻だっていうのに？オイオイ、勘弁しろよ、いやマジで……。

パァン！という乾いた発砲音に横を向いた霜見がまず初めに思った事がそれだった。

完全下校時刻を過ぎれば交通機関のほとんどは動かなくなる。遠出をして来た霜見にとってそれは最も避けるべき事態であろう。

しかし現実はそのような霜見の都合など構ってくれやしない。

そもそもの始まりは、三日ほど前に落ちた雷か何かだ。

完全にダウンしていたブレーカーを復旧させて、家電のチェックにはその後のまる二日を要し、一部の旧式については諦めていた霜見だったがまさか洗濯機を含む部屋の家電が総出で息の根を止めていたのにはビビった。

修理に出すか買い換えるか。

霜見の部屋は学生寮の一室であるが、幸いな事に事故によって損傷した家電類には寮の保険が出る為、買い換えた所でこちらの出費はそう多くは無い。

随分と年季の入った物も多かったから、ここはいつそ買い換えてしまおうか——、などと。

そんなふうに思考回路が回ってしまったのがいけなかった。

バスに乗ってやって来た大型家電量販店の帰り道、夏休み中の生活費をおろしに手数料のかからない銀行ＡＴＭを使おうと駅前のここに寄ったのが運のツキ。銀行強盗といういつの時代も廃る事無いトレンディな犯罪現場に居合わせてしまった霜見は、

『暗証番号をお願いします。暗証番号をお忘れの場合は通帳またはカードをお持ちになって係員までお申し付け下さい。暗証番号を――』

「あ、ヤベ」

合成音声にて、操作続行の要求をしてきたＡＴＭを前に暗証番号を未だに思い出せずにいた。

「おらそこ！静かにしろって聞こえなかったかあ！？」

トレンチコートにニットハットという、強盗するにしても季節感ってあるだろ？と言いたくなるような格好の男は、オートマチック式の拳銃を手に怒鳴りたてる。

体格は霜見よりも一回りほど大柄で、年齢も上だろうか。あご髭のおかげで妙に老けて見えるが、実際、そこまで離れた年齢ではないだろう。顔つきやしわの入り方が、未だ成長期にある未成年のそれを如実に表していた。

が、まあだからと言って何だという話である。

こういう時の最善は無抵抗と相場が決まっているので、霜見は別に何か事を起こそうとは考えずに素直に両手を上げた。

霜見はそれで問題なかった。強盗も同様だろう。

しかし操作入力が無ければ自分自身ではどうにもならないＡＴＭ筐体の方はそれでは困るらしく、女性の響きを持つ合成音声が再度

の要求を霜見に、

『暗証番号をお願いします。暗証番号をお忘れの場合は通帳またはカードをお持ちになって係員までお申し付け下さい。暗証番号をお願いします。暗証番号をお忘れの場合は通帳またはカードをお持ちになって係員までお申し付け下さい。暗証番号を……』

「うるせーって言ってんだろーが！さっさと暗証番号入れてやれよ！」

「ちょ、ちよつと、待って！待ってくれ！」

あー……、と頭を掻きながら霜見はATMのタッチパネルを操作する。初めは誕生日に設定していた暗証番号だったが、そういった簡単な個人情報から割れてしまうパスワードは非常に危険だとテレビのみのさんが言っていたので先々に番号を変更したのだ。

——どんな番号にしたっけかな……？

全くランダムな数列では無かった筈だが。

「円周率か？」

『暗証番号が違います』

「ルート3か？」

『暗証番号が違います』

「分かった、鳴くよウグイス……」

『暗証番号が違います。誕生日などに設定されてはいませんか？』

「そりゃ先々月までだな」

『0000などのゾロ目、1234などの通し番号も人気の暗証番号ですが？』

「いや、そんなのも危険だつてみのさんが言つてた」

『数字では無くナンバーキーの箇所を暗証番号として登録する場合もありますか？』

「あー、四隅とか二段目とか、そういう事ね。でもそれ数字の並びが変わったら自分でも分かんなくね？」

『携帯端末など、ご自身の所有物に付随するナンバーキーを用いればその点の心配はございません』

「あ、そうか。頭いいな、お前」

『学園都市中央銀行ATMは常に最良の判断と結果をお客様に与える事が出来ます。——ところで、暗証番号はまだですか?』

「つと、ちよい待ち。あ……、まだ思い出せねーや」

「どんだけやこしいパスワードにしたんだよお前エエエエエエ
！」

ついにキレた強盗が怒鳴り声をあげた。

「待ってエエエー！物騒なモン向けないでー！もう出かか
ってるから！あとひと踏ん張りだから！」

と、霜見がハンスアップで声を振り絞った、その時だ。

P i r r r r r r r r r r r ! というやけに耳に突き刺さる電子音と、それに負けないぐらいのソプラノボイスが慌てた様子で、客の集まっている待ち合い席の方から――

「きゃ、きゃあああ！しまったのですー！自動通報すると警報も一緒に鳴ってしまうんですしたー！」

未だにけたたましい電子音を鳴らし続ける携帯の持ち主は、それ

は女の子であつた。

短い桜色の髪の子が、あわあわ、という効果音と共に慌ただしく携帯を操作している。

可愛らしい女の子だつた。年の頃は十二程度だろうか。

身長一四〇にも満たない、ちんまりとした女の子がわたたと携帯を持て余している姿は、効果の程の分からないマイナスイオンやプラスマクラスター等よりは確実な癒しの効果があるみたいだな、とどこか優しい気持ちで霜見はその様子を眺めていた。

——あれ、プラスマクラスターって癒し効果だっけ？

特殊な思考回路を働かせる霜見の視界の中、その光景に共に呆気に取られていた銀行強盗の男がはつと気が付いて、

「デメエ！なにしてくれてんだア！！」

怒声の混じる大音声。

ひい、と表情を凍らせる女の子に男は手にした銃を適当に向けて、パン！と。

何の躊躇もなく引き金を引いた。

・
・
・

電子音を掻き消したのは、それよりもやや低音にこもった銃声の炸裂であつた。

無味乾燥な火薬の匂いと音とがその場の空気を一瞬で冷やし、世

界が凍りついたかのような錯覚はしかしほんの一瞬で、次の動きは女の子の手からこぼれ落ちた携帯が床に落ちて砕ける、そんな硬い音から始まった。

「ひ…、あ……」

女の子は無傷だった。

表情を硬直させ、大きな瞳の中に真珠のような涙の粒を溜めていく。

今にも泣き出してしまいそうな顔だったが、しかし女の子の喉の奥からは声では無く空気の漏れるような、は、とか、ひあ、とかいったそんな音だけが発せられている。

知り合いの研究員、今どき珍しいビン底眼鏡によれば、低年齢域の人間は大きなショックを得ると感情の発露がうまくいけなくなり、声を発する喉と表情の筋肉が痙攣したかのように硬直してしまうらしい。恐らくは今の状態がそうなのだろう。

「人傷沙汰はスマートじゃねえ。人質取んのも面倒クセエ。とはいってもな？物事には効率つてもんがあつてな。分かるか？」

霜見が受け売り百パーセントの観察眼を開眼している最中、銀行強盗の男はゆっくりとした歩みで女の子に近づいている。

女の子は硬直したまま、その犯人のゆるりとした足取りを見るだけだ。

——おいイイイイ！ヤベーだろあれ！撃たれたよ、女の子！幼女なのに撃たれちゃったよ！あらゆる意味でマナー違反だよ！どうすんだよ、オイ。助けるか？俺が？いやいやいや、他にも能力者ぐらい居るだろーが。居ないの？ねえ、ほんとに居ないの？誰かアア！お客様の中に熱血系主人公はいませんかアアアア！古の力を

封じたクールな二枚目系主人公でもいいんですけどオオオオオ！！

居る筈は無かった。

そう都合のいい事が簡単に世の中に転がっている訳も無い。

無駄に長い逡巡の後、あー、と息を吐いて霜見はハンスアップの両手を下ろした。

幸いな事に強盗の注意はまだ女の子に向いている。

単独でこんなバカやらかすような奴は十中八九が能力者なのだろうが、背後から不意をつけばいくらか楽に制圧できるだろう。

善は急げ。案ずるよりも生むが易し。一か八か……はなんか不吉だから除外して。とにかく行動あるのみだな、と霜見はその場から一步を踏み出した。

そして、体温感知式のセンサー内から熱源が遠ざかり、利用客が帰るものと判断した昨今の頭のいいＡＴＭ筐体が親切丁寧に、

『お帰りですか？カードを忘れていきますのでお持ち帰りください。またのご利用をお持ちしております』

「あ、ヤベ」

パン！と。

振り返った強盗は、やはり、躊躇などしなかった。

第3話 突発性巻き込まれ症候群【トラブル・リソブル】

パン！と。

相変わらず躊躇を見せない銃声が響き、霜見がATMの対面にあった待ち合い用長ソファの後ろに飛び込むように逃げ込み、ほぼ同時、銃弾がソファの木製の肘掛を弾き飛ばす。

それは僅か一秒間に連続した動きの一連である。

それぞれの動作にはコンマ分ほどの時間の違いしか無く、重なり合った現象の結果として霜見が無傷だったのは幸運だったと言いたいようがない。

——危ねえなオイこらア！もつと躊躇しろよバカヤロー！これ以上悪の道に進んだら俺はどうなってしまうんだ的な葛藤の演出くらいしてみろってんだよー！！

思考の中で叫び声を上げる霜見の周囲、全ての動きが止まると、銀行内の空気もまた一緒に静止した。

静まり返った室内、クソ、という呟きは強盗のもので、ふう、と吐き出した息は霜見のものだった。

——さーてえ、回避不可のバトルが始まっちゃったぞ……。負けイベントとかじゃねーだろうなあ。勝ってもムービー挟まれて負けた事にされちゃたまんねーぞ。

思考で頭を満たす事で何とか落ち着きを取り戻した霜見は、少しだけ頭をのぞかせて状況を観察した。四散する木の破片。拳銃の狙いをソファへと定め直す強盗の姿。

先ほどの一連の後に残った結果だを鑑みて、見識に至る時間は数

秒だった。のぞき見ていた頭を戻し、霜見は頷く。

——あー、なるほど。そういう事ね。分かり易い能力してんなあ……。

敵の能力に予測を立てる。

結果と想定があれば予測はそう難しくはない。

まあさすがに、この程度の観察で理屈と原理にまで知識は及ばないが。そんな上等な頭じゃない。自負するのも情けない話だが。

まあいい。思考の切り替えは早い方だ。霜見は次の行動を考える。予測と結果を想像し、最適な行動は何か、と選ぶ。取捨選択だ。

最善の行動は、そも何もせずにおとなしくしているという事で間違いなかったが、しかしその選択はつい先ほど無くなったばかりで、次の最善は早急に強盗を無力化して帰宅の途に着くという事でいいだろう。

その為に、霜見は動かす。

組み立てた行動へと移る為に、まずは身体よりも先に、口を。

「随分といい腕前だなあ。次元も真つ青じゃねえの？九十度も軌道曲げて飛ぶ弾丸なんて、非常識もいいところだぜ」

強盗が拳銃を向け、霜見は真後ろにあったソファの後ろへと非難した。

拳銃を向けて撃つ動作と霜見の回避の動作とはほぼ同時に行われ、結果として霜見は銃弾を回避できた訳だが——ここで一つ不思議なのはATMの前に立っていた霜見を狙った弾丸が、何故、軌道を曲げてATMの対面にあったソファの肘掛を破壊したのか、である。

常識的に考えて、跳弾以外の理由で銃弾が軌道を曲げる事はまず無い。

それが長距離砲ともなれば地軸の影響なり地球の自転によるコリオリの力なりを考慮に入れて射角を調整するものだが、たかが十メートルも無いような距離の運動にそんな物理量が目に見えるほど影響する訳も無く、そも銃火器の進化とは威力と精度の進化であって正確な直線軌道を描く為に重量や火薬の配合やライフリングなど様々な発展をしてきた昨今の銃が普通に撃って弾丸を九十度も曲げていたらそれはもはや欠陥品どころかファンタジー世界の魔法のような代物と言っていいだろう。

なので、と考えるのは単純な結果論的推察であり、純粹無垢に考えて導き出した答えであり、というかそれ以外に説明出来んの？という消去法的な解の求め方である。

「弾丸の——いや、物体の軌道を曲げる事が出来る、つてのがアンの能力かい？」

クハ、という乾いた笑い声が、霜見の言葉に対する答えだった。

「まったく、一発で見抜くんじゃねえよ、ガキ。見逃す理由が無くなっちまうだろ？」

んなつもり本当にあるのか？考え、そして霜見は聞く。余裕の含みを持った強盗の言葉を。

アクセルポイント
「速度分岐。俺はあらゆる速度の方向を曲げる事が出来る。銃弾だろつとな。分かるか？隠れる、なんて行動は俺の前じゃ無意味なんだよ」

どこか誇る様に。自信と過信とが混ざったような、陶醉の口調で強盗は言い放った。

その声の響きに霜見の思う事は一つだ。

思った通りだな、と。

予測した通りの能力で、それ以上の効果もそれ以下の見落としてもなさそうだ。

一度目、女の子を狙った銃弾も能力で軌道を曲げたのだろう。適当に銃を向けたにしては狙いが良すぎた。数メートルとはいえ、構えも無しに携帯電話サイズの標的を狙うのはプロ並の腕前でも難しい。

躊躇しなかったのも、能力で弾丸の軌道を操って標的以外には当たらない自信があったのだろう。

存外、穏便な性格をしているものだな、と霜見は思った。ビビリと言い換える事も出来る。脅す事は出来ても、見せしめる事は出来ないタイプ。

——どの道、人殺しは無理そんな奴だな。俺が頑張らなくても、アンチスキルが来たらあつという間に制圧されちまうんじゃない？

まあいいや。手遅れだし。

終電もあるし、という最後の理由を付け足して。

霜見はその場に立ち上がった。特に構えは無く、両手は軽く開いている。

「隠れるのはやめたよ。無駄みたいだし、時間も勿体ないし」

「いいねえ、素直で。俺にもそういう頃があつたよ？ いや、ほんとに」

あつそ、と霜見がどうでもいいという声色を出すより早く、

「外れるから動くなよ？」

パン！と。

三発目の弾丸が撃ち出された。
バチン！という音が響き、

「——は？」

呆気にとられる声は相も変わらず強盗のものである。

何が起こったのか、現象は簡単だ。

強盗の持った拳銃から吐き出された弾丸が、霜見と強盗との距離の中ほどでほぼ直角に軌道を曲げたのだ。左右ではなく、下へと。銃声の後に響いた音は弾丸が床にめり込んで圧潰する音であり、そして、強盗が呆気にとられたのは、その現象が自身の能力によるものではなかったからだ。

「——今の、テメエか？」

「他に誰か居ると思ってるの？」

言葉が終わるか終わらないか、というタイミングで強盗は次の引き金を引いた。連続二回。乾いた音が響き、そして床のパネルが碎ける音がまたも、二回。

結果は先ほどと同じだった。

銃弾はそれぞれ、強盗の能力によって左右に直角に軌道を変えて、そしてもう一度、霜見の能力によって軌道を変えて落ちた。

床にめり込み、弾丸は圧潰する。

呆気にとられていた強盗の表情には新たな色の感情が浮かび上がっている。

「どうなつてやがる……!？」

驚きと、恐怖だ。

その色を見て取った霜見は己の勝ちを確信し、不動だった足を一步前へ進めた。

「何つて、アンタ知らないの？重い物はさ、簡単にや飛ばないんだよ」

「てめえ——」

強盗が構え、引き金を引く。

よりも、早く。霜見は拳銃の重力方向を変えた。

およそ三十倍程度の重力加速度で、方向は後ろ——つまりは、その銃を構える、強盗の方へと。

「ガッ、ハ!？」

拳銃の重量は、中の弾丸も含めておよそ一キログラム。

三十倍の重力加速なら、単純計算で三十キログラムにまで重量は増大する事になる。

銃と強盗との距離は腕の長さ五、六十センチメートルくらいであろうが、その程度の落差であるうと三十キロもの重量が拳銃サイズに凝縮されているとなると、強盗のダメージは心理的にも物理的にも多大であつただろう。

その霜見の予想通り、強盗は構えかけの腕ごと胸部に直撃した拳銃に押されるような形で背後へと大きくたたらを踏んだ。

げほっ、と息を吐き出して、しかし未だ衰えを見せない好戦的な瞳は霜見を捉えたままだ。

「ク、ソがあ！」

意気を吐いて、強盗は拳銃を己の身体から引き離した。重量三十キロの鉄塊を。腕力に物を言わせたわけでは無く、己の能力によって。

アクセルポイント
速度分岐、と言ったか。

速度の方向を変える能力。この場合は、霜見の重力操作によって背面方向へと“落ちる”拳銃の落下運動を、単純な直線運動とみなして能力を発動したのだろう。速度の分岐を逆向きに、反射するように行えばいい。

——そついやあ、レベル5の第一位はまんま反射の能力者だっけ？

と、前に聞いた事がある。

情報元は相変わらずビン底眼鏡の研究員だが。

その程度の知識でレベル5を語るのもおこがましいと言うものだけど、などと考えつつ霜見は左の人差し指を天井へ向ける。

「ぐがつ！？」

がつん、と音がして、拳銃が強盗の顎を直撃した。また重力の方向が変わったのだ。重量を五十倍まで引き上げて、今度は天井方向へと拳銃は落ちる。

銃を構えていた位置が悪かった強盗は顎先に五十キロの鉄塊を叩き込まれ、仰け反る様に体勢を崩した。銃のグリップが強盗の手を離れ、ごどんっ！という音と共に天井に落ちる。

——あ、暴発とかそついや考えてなかったな……。まあ、最近の銃は安全装置が優秀だから結果オーライだろ……。

白い天井に埋まる黒い鉄塊のコントラストを見ながら、ぼんやりと霜見は考えた。

天井を見上げていた時間は僅かに一秒。

しかし向かつてくる攻撃のみに気を張っていた霜見は、その時間で敗走の手段を選んだ強盗が駆け出すのを一瞬だけ見逃した。一路、猛烈な勢いで走る強盗の目的地は出入り口ではない。

「ひ、い……！」

客の集まる待ち合い席へと、その手が伸びる。

「人質を取るつもりか……！？かつこ悪い事してんなよな！」

言うが早いか、霜見も強盗に遅れスタートを切った。

はたして結果は霜見の思惑その通りだった。標的にされたのは先ほど携帯の警報アラームを暴発させた女の子である。

恐怖か、驚きか、何れにしても女の子は動けない。

強盗と女の子との距離は一メートル。

こちらと強盗とは六メートル。

間に合え、ではなく。間に合わせる、と。

「――！」

息を吐いた。

自分の重力方向を変える。

感覚としては、床が一気に持ち上がって七〇度近い急激なすべり台に変化したようなものだ。

床を蹴り、常よりも二倍以上長い歩調で、強盗の向かう方向へと重力加速を加えた霜見の速度が、一步、二歩、三歩――

「――捕まえた！」

強盗の頭を。

重力を戻し、付けた勢いはしかしそのままに、霜見は前方へ身体を飛ばす。

肩に強盗の頭を乗せてロックしたまま、倒れ込むように――

「飛び込み式の、ネックブリーカー……！」

叫んだのは誰か。どうやら客の中に旧式の肉弾戦プロレスファンが居たらしい。

まっとうな重力加速に引かれる霜見の身体は一秒も無い滞空時間の後、どすんっという箆った打音と共に床に落ちた。

ガハッ、という強盗の短い断末魔。

テンカウントを取るまでも無く、ノックダウンは確実だった。

最後に天井から拳銃が落ちて硬い音をたて、動くものは居なくなり、学園都市の街角で起きた一般的な強盗事件は一般的な解決を見て、終了した。

ふう、と霜見は一息。

忘れた頃になって、ATMの機械音声が響いた。

『あの、いい加減にカードを受け取ってほしいんですけど？』

第4話 その日、一番の不幸【ハードラックデー】

何が悪かったのかと言えば、恐らくは駆け付けたアンチスキルの事情聴取に長々一時間も付き合ってしまった事だろう。

いや、それ以前に感泣しながら感謝の言葉を嵐のように浴びせまくる桃色髪の女の子の相手をしてしまった事がそもそも間違いだっただのかもしれない。

「本当に、本当にありがとうございます！ひっぐ、先生の携帯さんがバラバラになった時はもう駄目かと、駄目なんだと！本当にありがとうですー！でも、危ない事はあまりしてはいけませんですよ！先生との約束ですよ——！」

なんて。

やたらと自分の事を先生と言いたがる泣き顔全開の女の子を十分以上も持て余している内にアンチスキルが駆けつけて来て、任意同行などと言いつつも半強制的な連行をくらってそれからさらに一時間……。

結局、最終下校時刻を大きく過ぎた頃になって解放された霜見は、動かなくなつた交通機関の時刻表を無意味に見つめた後、とぼとぼと徒歩で帰宅する事となつた。

「あーあ……」

もはや口からまろび出る言葉に意味を持たせる事すらきびしい状況だ。

妙な正義感から強盗を制圧して見せた事が全ての発端だったのだろうか。後悔はしないが原因は完全にそれなので難しい心境だ。

正負混濁が著しい感情と歩調で、遅い夕暮れの学園都市をひたすら霜見は歩き続けた。

・
・
・

歩き続けたおかげで。

というか、普通に二時間弱の距離を歩いた結果として。

「いらっしゃいませー」

霜見竜潜は自身の学生寮から歩いて五分ほどの最寄りのコンビニまで辿り着いていた。

縦縞の入った見慣れた制服姿を横目に、疲れ切った足を引きずる様に奥のデザートコーナーに向ける。ちょうど今日、新発売として売り出されていた商品があるのだが、今の霜見の狙いはそれだ。

前々からテレビやチラシで宣伝されていた商品である。

ぶらっと家電を見た帰りにでも買って帰ろうと思っていた。出掛けた主目的ではないが、楽しみレベルの度合い的にはこちらの方が上だ。

だから。

霜見はデザートコーナーの冷蔵棚の一番目立つ中段、カラフルな装飾で主張する新発売！のポップを目に留めて――

「……売り切れかよ」

膝から崩れ落ちた。

新発売、焼きリンゴプリン。

食べたかった。本当に、食べたかったのだ。

あんな事件に巻き込まれた上に最終下校時刻を逃して延々二時間以上も歩き続ける羽目になっても忘れる事など無かった。

いやむしろ帰宅してそれを食べる一瞬のみを目指してここまで重い足を引きずって来たと言っても過言ではない。

希望が撃ち碎かれる瞬間というものは本当に呆気ないもので、絶望がひしひしと両肩に手を回す感覚を霜見は疲れた身体に感じていた。

だが、しかし。

「う、お、おああああ！ここまで来て諦められるか、俺にはまだ戦える。まだやれる……！去れ、絶望よ——！」

気迫と共に立ち上がった霜見を見つめる店員さんの目はどこまでも遠く、深く、冷ややかだった。それがそれはさておき。

急に覚醒した霜見にはその程度の眼光線など通用しない。

肩に手を回した絶望という名の弱音を振り払う様に、堂々と肩で風を切る歩みでそのコンビニを後にした霜見は、さあ！という意気を吐き出して、足を向けた。

自室のある寮ではなく。

同じ商品を扱っている、近くのコンビニへと続く裏路地へと。

——隣の区のコンビニまでは普通に歩いて二十分。しかし！裏路地と廃研究施設の敷地を突っ切ればぐっと時間は短縮して、僅か五分！いける！いけるぞ——！！

基本的に。

住民の半数以上が学生という身分で構成される学園都市では最終下校時刻を回った後の人影は極端に少なくなるものであり、人目になくなった時間帯の、しかも裏路地などはスキルアウトの溜り場になっっている事が多く、更に付け足すなら廃墟になったとはいえ研究施設は普通立ち入り禁止なのだが――。

「俺は勝つぞ……。こんな負け犬みたいな姿で一日を終えてたまるか……。！」

疲労が裏返っていい具合にアッパーの入った霜見のテンションは、もはやうまく思考回路を働かせる事など出来ずにいた。
今の霜見の頭を解析するならばこうだ。

――とにかく甘いものが食べたい。

――新商品が気になる。

――絶対に食べて見せる。

人間の行動原理なんていつの時代も単純なものだと相場が決まっているものだが。

とりわけ、今の霜見の行動の理由など、そんなもので充分なのであった。

●
●
●

路地裏を進み、その奥の研究施設を突っ切れば、コンビニのある通りに抜けられる。

単純明快な理論によって構築された霜見の歩調は、家電量販店の
ある学区から寮の建っているこの学区までを歩破したそれよりも幾
分か軽やかである。

三日前の落雷から始まって今日の強盗事件。

このところの日々を振り返ってみると、とことん霜見はツキに見
放されているようだった。

しかも順調に不運のレベルが上昇しているのだ。今度あたりはス
キルアウトのボスクラスにでも遭遇して強制バトルになるのだろう
かと。逃げか喧嘩か、それ相応の覚悟を決めていた霜見だったが、
しかしこの最後だけは何の問題も無く目的を達せられそうな気がし
ていた。

スキルアウトの影は見えないし、それ以外の何らかの面倒事も起
きてはいない。

落雷のあった日には近隣の学生寮で謎の爆発事故が起きたらしい
が、そんな兆候も今は無い。

まあ、平穩無事というのが一般的な日常風景なので、それはまる
で珍しい事ではないのだが。

「おっしや、到着う」

特に問題も無く。

まだコンビニではないが。

路地の細道をぐねぐねと歩いた霜見の前、路地裏近道の大山場、
廃墟となった研究施設のフェンスがそこに現れていた。

この研究施設の敷地を突っ切って表通りに出られればそこにコンビニはある。ミッションコンプリートはもうすぐだ。

ちゃっちゃと行こうか、と霜見は施設の周囲をぐるりと囲う二メートル程のフェンスを軽々とよじ登った。

よじ登って飛び下りた先は既に施設の敷地内。位置としては裏口近くの駐車場だ。

路地に面したこちらの側に車の出入口は無いが、通りと繋がっている正面の入口から敷地内の道路を抜ければここにも車が停められる構造だ。

実際に、研究施設の建物近くには何台かの車が沈黙したまま停車していた。

——あれ、車？ここって閉鎖されてる筈だろ？ああ、施設の機材とかを引き払う業者とか、そんなんか？

よくよく見れば白い研究施設の三階、その一室にはぼんやりとした明りが点いていて、もしかしたら誰かが居るのかもしれない。様々な専門機材が置いてある研究施設では、機材の解体や持ち出しに専用の道具や車、人員が必要な場合が多く、建物の閉鎖と共に内部をすっからかんにするのは難しい。

なのでまず、施設の閉鎖が行われた後に業者が機材を引き払いに来るのが一般的だ。

だからここも同じ状況なのだろう。

深く考えもせずに、霜見はそう結論付けた。

別に何でもいいし特に興味を引かれるような事でもないので、車

についての考察はそこまで打ち切る。

夜間作業ごくらーさん、と。

霜見はそれら車の列をスルーして正面の出入口へと急いだ。

いや。急ごうとした、という方が正確だ。

何故ならば結果的に霜見は急ぐ事が出来なかったからであり、その理由は、ドガシャーン！と猛烈な勢いで目の前の軽自動車のボンネットに落ちて来た何かに足を止められたからである。

「うおおおお！？」

驚いた、なんて言葉では表現しきれない。

心臓が口から飛び出ると、割とマジで心配になるほどにその不意をついた心理攻撃は霜見の精神にダメージを刻んだ。

「びっくりしたあ……。何だ、こ、れ……」

そして次の心理攻撃が来た。

今度は、心臓が凍ってしまいそうになるような、そんな類の。

何故ならそれは、軽自動車のボンネットをひしゃげて落下した、それは、白衣を纏った首の無い人型だったからだ。

「……………」

ふと星空を見上げてみる。星なんて出ていなかった。曇り空にある雲に透ける月が微妙に白い。

そして視線を戻す。

焼き焦げた断面から煙を昇らせる、五体から一つ足りない人間っぽい何かがあった。

「――」

俺、疲れてんのかな。目頭をよく揉んでみる。常備している目薬をさして手の甲で溢れた液体をふき取った。何故だかいつもよりしみた気がした。

そして視線を戻す。

首無し死体だ。

「現実じゃねえかアアアアアア！親方アアアアア！空から死体があアアアアア！？」

絶叫した。

というか、それ以外に何も出来なかった。

――何だ何だ何だ、最近の俺って死兆星でも背負って歩いてんのか！？家電、強盗、その次が死体ってどういう事だよ。経験値カンストしてんだろーがアアアア！アリアハンでバラモスゾンビが出てくるレベルだぞこんなモン！不幸すぎるぞこんなの！今この瞬間に俺より不幸な奴が居るなら出て来いやアアアア！！

しゃがみ込んで後頭部をがしがし掻きながら、ギアをNに入れたままアクセルベタ踏みする様な凄まじい空転をする思考を抱える霜見の頭上方向、

「あちゃー。超目撃されてますよ」

「あーらら。ちよつとふっ飛ばしすぎて訳よ」

「……………」

なんて、色とりどりの声が降ってくる。

……、と死んだような瞳で仰ぎ見れば、建物の三階部分、ぼんや

りとした明りが点くその部屋の窓から三人の人影が顔を出していた。

一人は髪の短い、幼い顔立ちの少女だった。

もう一人は金髪碧眼の少女。

最後の一人は肩口までのショートカットの少女で、この少女だけ、何故か霜見ではなく虚空に視線を注いでひたすらぼーっとしていた。

あんたら誰だ？何でこんな場所に？今降って来たこれと関係あるの？

なんて疑問が次々と湧いて出てくるが、そんな知的好奇心を満たす事よりも逃げ出したい気持ちの方が霜見の中にはいっぱい、どうもヤバイ現場に居合わせてしまったらしいという後悔と緊急警報の鐘の音だけが耳元で鳴り響いているようで、そういえば朝の正座占い（正座の時間によってその日の運勢が決まる）の結果はダントツで凶だったという事も無意味に思い出していた。よく当たる占いだ。全国で同じく凶が出た方々の安否が心配でならない。朝の貴重な時間に40分以上もテレビの前で正座をする馬鹿野郎が霜見以外に居たらの話だが。

などと。にわかに現実逃避を始めた頭を振って、思考回路を現世へと戻し、そしてそれは戻した矢先だった。

貫く、という表現がまるでぴったりの鋭い視線を持った新たな少女がその三人の後ろからゆっくりと現れたのだった。

「何アレ、メンドくさ……。ま、いいや。今日の仕事はこれで終わりだし、ちゃっちゃんと帰りたいし——」

少女は、視線で霜見を貫きながら言った。

「——ブチコロシて、終わらせちゃいましょ」

第5話 その日、一番の不幸【ハードラックエンカウント】

聞き間違えたかな？

と、思いがけずぶつ殺す発言を耳にした霜見はあまり期待できそうにも無い希望的観測を持ち出していた。

「えつと……。あれ、今、殺すとか聞こえた気がするんですけど」
「……」
「うん」

キラキラ、という効果音と背景に虹色の星々が見えそうな程の乙女チックな笑顔を浮かべて、最後に現れた少女は言った。

うん。
うん？

一瞬、霜見はその言葉の意味が分からなかった。

うん、って何だ？ どちらという意味だ？

冷静に考えてみる。

うん、とは。一般的には、そうだよ、という意味合いを持つ言葉だ。つまりは肯定の意味を持つ言葉であり、うん〃はい、という方程式が成り立ってしまう言葉であり――

「え、俺、殺されんの？」

「だいせいかい！」

あ、ヤベ。

またも輝いた女性の笑顔を見て、霜見は本能的にそう思った。第六感がフル稼働で逃げると言っている。

バイバイと手を振る女性の周囲で、パチン、と白い光が瞬いた。

「あ、これマジヤベエ！」

踵を返し、全力疾走。

逃げの体勢に入った霜見の右サイド、白亜の閃光がボンネットの潰れた軽自動車を貫いた。

と、霜見が認識した瞬間、車体は爆破炎上。至近距離の爆炎と破片が霜見を襲う。

咄嗟に重力波で飛散する破片を弾き飛ばして、背後へのバックステップで炎熱から距離を取り、熱波の煽りを受け背中から地面に落ちた霜見を更に衝撃波が叩き伏せて、そのままの状態で霜見の身体は二回、三回転。さらにバウンドを数回繰り返し、しかし何とか生き残る。

死んだ！今マジ死んだよ！と否定から始まる肯定で自身の生還を歓喜する霜見であるが、しかし寝転んでいる余裕があるとは思えないので素早く身を起こす。

少し離れた位置には炎上する車体が嫌でも目に付き、ころころと火のついたタイヤが霜見の前まで転がってきた。

——め、メガ粒子砲オオオオオオオ！？ビーム兵器撃つてきやがったよあの女！何アレ！？誰アレ！？

「ちょっと、避けないでよ。私達もう帰るんだから」

「いやいやいや、だったらもう帰ればよくね？俺なんか気にしないでさあ、帰って寝ればいいじゃん。俺も早くコンビ二行って焼きリンゴプリン買って帰りたいのよ。ほら、今両方の利害が一致したよ？思惑は一緒だよー？」

「それが出来たらこんな居残りしないって。あと、焼きリンゴプリンあんまり美味しくないわよ？」

「え。マジ？」
「うん」

という言葉と同時に、白い熱線が霜見の方へ飛び、ギリギリ一秒、霜見は横っ飛びに体を飛ばしてそれを回避した。

「おいイイイイ！世間話のついでに殺そうとすんじゃないよ！前置きくらいくれてんだよオオオオ！」

「だーから、避けんなつつてんでしょうが！」

明らかにイラついている少女の声。無茶を仰る。そう思う霜見の視界に瞬く、白い光が今度は連続三発。

「話し合いの余地も無えのかよ！？」

とにかく霜見は滅茶苦茶な軌道で地面の上を転げまわり、飛び跳ね、光を回避する。

「超しぶといですね。超能力者^{レベルファイブ}の攻撃をここまで避けるなんて」
「結局、見上げた回避能力って訳よ」

ビーム兵器搭載型少女の傍ら、傍観する二人の少女の言葉が霜見の耳に届いた。

一般的な野次や無意味な情報に割り当てる感覚器官など今の霜見にはまるで無かったが、しかし彼女らの台詞の中の一部、とある発言については別で、目ざとくそれに気付いた霜見は新たな驚愕を己の内側に得た。

——レ、レベル、5ウ！？おいおいおいおい、学園都市の頂点が

ここに居るって！？最強七人衆が勢ぞろいですか――！？

別に勢ぞろいではないが。

レベル5。

学園都市にごまんと居るスプーン曲げ程度の能力から常軌を逸した物質創造能力まで、数々あるそれら能力を繰る者達を総じて、世間一般では超能力者と呼ぶが、しかし本当の意味での“超能力”を発揮できる者は二三〇万人と存在する能力者の内の、たった七人である。

自然災害にも匹敵する強大な能力を手足とする、ただ一人で軍隊と渡り合えるとも言われる、学園都市最強の七人。

その七人の内の一人――いや、もしかしたらあそこに居る四人が全てレベル5だという可能性もあるがそれはあまりにも自分が可愛そうなので霜見は暫定的にビーム兵器搭載型少女一人をレベル5だと仮定して。

霜見は驚愕の表情と絶望の眼差しで少女を見つめた。

こちらの表情が彼女の目にはどう映ったのか、その少女は攻撃の手をいったん止めて、

「あら、やっと気付いたの？鈍いのね」

ふん、と。

切れ長の視線が、正面から切り込むように霜見に注がれた。

その視線と声に、ふと思い起こすのは今日の夕方に遭遇した銀行強盗の事だった。

自分の能力に対する絶対の自信を含んだ高圧的な物言い、過信とも取れる陶酔の響き。

同じような含みを持つ声色が、あの窓際に立つ姿からも取って見

ることが出来た。が、強盗を働いたあの男とこちらを見下す彼女とでは、その身に持つ雰囲気がまるで違っている。

冷酷さと多少の狂気を感じさせる空気を持っていたあの強盗。対して、こちらに感じる空気はまるで氷河期の再来を告げるかのような底無しの冷氣であり、同時に、一瞬で何もかもを消し飛ばすような灼熱の気配だ。

その瞳は、まるで路傍の虫けらを見るかの——否、見るという行為すらしていないようだった。

私の視界に入ってるあのゴミは何？とでも言いたげな目をしている。

はたしてこちらの存在が正しく彼女に認識されているのかどうか、そんな疑問が浮かび上がるほどにその目は霜見に対する関心を見せない。

それは自分が絶対の強者であり、頂点であり、何が起きようともその事実と優位は覆らない、と。そう思っている者の目だった。

間違はなく彼女は思っている。息をするのと同じくらい簡単に、霜見のその命と人生を打ち切りに出来ると。

——久しぶりに会ったなあ、あんなキョーレツな目えしてる奴に……。

強盗の能力強度がいかほどのものだったのか霜見には欠片の興味も無いが、しかし、対峙してみればここに居る彼女と強盗との差異は歴然だった。

目が違う。

陳腐な言い回しに収まるが、しかしこれ以上に適切な表現も見つからない。

わざわざ名乗りや証拠を提示するまでも無く、霜見は、自然と彼

女がレベル5であるという不確定な情報を呑み込んでいた。
呑み込まざるを得ない。

それほどまでの隔絶した空気を、レベル5の少女は纏っている。

その強烈な視線のおかげか、現実味を失っていた頭に僅かばかりの冷静さが戻り、できた余裕に遠慮なく思考を突っ込んで霜見はうつすらと考えていた。

聞いた事がある、なんてお決まりの説明台詞ではないが。

相変わらずのビン底メガネの研究員伝えの情報による、相手の戦力分析。

多角的かつ多面的な能力研究を手掛けているというそいつからは、珍しい能力やレベルの高い能力者の話をよくされる。学園都市の最上位、レベル5の話題もまた然り。七人の能力はおおかた聞いている。ほとんど忘れたが。

—— 思い出せ。メガ粒子砲撃てる能力なんぞ、元からしてそう数は無え。

例えば、粒子波形を操作するような能力。

例えば、熱量を操作する様な能力。

例えば、電子を操る様な能力。

なるほど、と。霜見思考は一瞬の考察を連鎖させて現状の回答へと行き着いた。

七つの選択肢の中から、最も適切な答えは何かと、記憶の引き出しを探ってみる。

「なるほどな。お前がそうなんだな——」

言葉を区切り。

息を吸う。

吐き出すと同時。

手さぐりの思考に触れた回答を、空気を突き抜けるような声で意気を張り、言い放った。

「最強の電撃使い！——第三位の超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴！！」

「……………あー」

「……………うわー」

「……………南南西に死兆星……………」

……………あれ？と霜見は違和感を感じた。

何がどう違和感なのかは難しいが、何となく、空気が凍りついたような気がする。

相手方の反応も良くない。

霜見の予想ではここで、その通りだよく気付いたな死ねー、という感じでやっぱり襲ってくるものだとばかり……………。

「……………えつと……………。あの、その……………」

何て言葉を口にすればこの微妙な空気を取っ払えるのか。

考える霜見の見上げる視界の中で、呆然と硬直してうつむいていたビーム兵器搭載型の少女がゆっくりと顔を上げ、数十倍に濃縮還元された液体窒素のような視線で地上の霜見を無条件に凍りつかせつつ、

ほんの一瞬で90度近く持ち上がった地面、認識の上ではもはや壁と呼ぶ方が正しいそれを、霜見は上に蹴り出した。反作用で身体は下を向く。

更なる重力加速の速度を得ながら、霜見は認識上の下方、概念上では霜見の前方にある研究施設の建物内へと、扉をぶち破って飛び込んだ。

直後。

重力の方向を正常に戻した霜見の背後で、メルトダウン原子崩しの光線が地面を沸き上らせた。

蒸発と呼ぶに相応しい消滅の結果を振り返った夜の空気に感じて、霜見は凍えるように冷たく感じる息を吐き出した。

——メルトダウン原子崩しって、こんなに威力が出んのかよ！？電撃の方が上位だから、てつきり強化型電子レンジみたいなモンだと思ってたじ

やねえか！くっそー、やっぱ人の話はちゃんと聞いとくもんだな！
やったね、また一つ知識が増えたよ！

後悔の思考で次の逃げ場を探す霜見。

もう一度外に顔を覗かせるのは自殺以前に愚かだ。逃げ場はもうこの建築物の内にしかない。

閉鎖されている割に非常灯がそこかしこに点いている建物内は存外に明るく、これなら外の路地の方が暗闇は濃いだろうと思えるほどだった。

まずは位置の確認。

今いる場所は建物の玄関口付近で、奥には広いロビーのような空間がある。

見つけたのはそのロビーの中央にある、鋼鉄製の二枚扉で構築された乗降口、エレベーターだ。暗闇に目を凝らし、回数表示を見る。

——地下に七階まであるな。とりあえず地下に逃げ込んで様子を見るか……いや、それとも逆に上へ……

という逃避のパターンを霜見が脳内で構築している、その時だ。どすんっ！という鈍い音が背後でしたと思い、軽く振り向くと、霜見がぶち破った扉のフレームの向こう側、蒸気を昇らせる地面に降り立った麦色の長い髪と意外と高い位置にある肩が見えて——

——さ、さ、三階に居ましたよねえ！？あなた今まで三階にいましたよねえ——！？

ゆらり。

振り向いた原子崩しは、ただ一言。
マルチタウナー

「ブチコロス」

「どこで選択肢を間違えたアアアアアア！！？」

多分、全部。

霜見は全力をさらに上回る火事場の馬鹿力を使って疾走した。背後にある凶悪な気配を置き去りに、一心不乱、エレベーターの扉を重力波でぶち破る。

この階に客がこの来ていなかったシャフト内はまるで虚空のように口を開けていて、照明の一切無い暗闇の底だけが広がっている。

「逃げんな、フナムシがアアア！！」

「意外とマニアックな虫けらチョイスですね——！！」

盛大な光の歓迎を背後に、霜見がその暗闇の中に身を投じるのは何の迷いも躊躇も無かった。

第6話 その日、一番の不幸【ハードラックタッチ】

「つと」

エレベーターシャフトの中から顔を覗かせた霜見は、開け放たれた乗降口から外へと出た。

すたん、と靴音を最小限に降り立つ床は、本来は部屋の天井として機能すべき部位である。

「はっはー、重力使いが素直に落ちてたまるかよ」

人影の無い一室は、つい先ほどまで霜見の居た研究施設のロビー部分だ。

上下の反転した世界をぐるりと見回して、霜見はもう一度床に降り立った。今度は正常な室内の床の部位に。

エレベーターシャフトの暗闇に飛び込んだ霜見は、階下に落ちたと見せかけて重力方向を上方へと操作していた。上へと続く退避路を、霜見は“落ちた”のだ。

咄嗟の判断だった。

それが最善だと思った訳ではなかったが、それ以外に退路を思いつかなかったのだから仕方がない。

結果として、追撃してきた原子崩しの攻撃はシャフトの下方へと向けられて霜見は難を逃れたのだから、思いつきも甚だしい回避方法が実によく功を奏したと言えるよう。

何が運が良かったのかと言えば、霜見の持つ能力が非常に希少だった事だろう。

学園都市に能力者はおよそ二三〇万人。その中で、レベルファイブ超能力の強度を身に帯びる者は僅かに七人。

しかしだ。重力操作という自分だけの現実を獲得した能力者は学園都市二三〇万人の中で一人、霜見竜潜だけである。パーソナルリアリティ

唯一。ただそれだけの特異性は、特定の条件下においては絶対的な有利として働く事がある。

近似能力者、とても言おうか。

例えば電撃使いや空力使い、エレクトロマスター エアロハンド空間移動能力者など。テレポーター

同種の結果をもたらす能力者達は、能力のカテゴリーごとに大別されて管理されている。

カテゴリーに分けられるということは、能力の概要を知られているということであり、互いの能力をどう見極めるかが最も重要な攻防となる能力者同士の戦闘においてそれは大きな不利となる。

故にだ。

学園都市でたった一つの能力を持つ霜見は、初見の戦闘においてのみ相手よりも多少の有利を得る事が出来る。

ちょうど、今がその状態だろう。

メルトダウンレベル5の第四位、原子崩しの攻撃を回避し、出し抜く事が出来たのはひとえに彼女がこちらの能力をまるで予測出来なかったからに違いない。

——ま、あのメガ粒子砲を避けられるのも能力がバレるまでだな。

だからこんな場所はさっさと立ち去ろう。

人気の無くなった研究施設を霜見は足音と気配を殺して後にした。原子崩しの照射痕の残る駐車場に出て振り返ると、研究施設の全ての部屋に薄ぼやけた蛍のような非常灯が点いている。

自分の死体を確認しにシャフトの中を探しているのか、それとも

各階の部屋でローラー作戦でも展開中なのか。

ともあれチャンスは今だ。通りに繋がる表の出入り口は見張られているかもしれないので、ここは敢えて元来た道に戻る。まさか彼女らも逃げた獲物がわざわざ舞い戻るとは思うまい。

——ひゃっはー！自由の身だぜー！このまま戻って別のコンビニで焼きリンゴプリン買って帰るんだ！。

スキップもしかねない軽やかな歩調で霜見は敷地を囲むフェンスの方へと向かった。

暗闇にぼんやりと浮かぶ地面の白は、幾何学的に並ぶ駐車場の白線だ。等間隔の区切りは駐車スペースの目印であり、敷地の表側通路に続く緩やかな曲線は車体誘導用の表示。矢印で通行方向が描かれている。

と。

その均等の取れた模様に一本、それら白線をぶった切るかのように伸びる線がある。

この線なに？

そんな疑問が脳裏をよぎりつつも、線を踏んで先を急ごうとする、瞬間だった。

「お、やっと現れたって訳よ」

声。

どこだ、と探す暇も無く、バシュッ！という空気漏れのような音が響いた。

その音と火薬の匂い。瞬時に霜見は気付いた。

——これ、溶断テープかよ！？

足元に驚愕の事実。

鋼鉄製の扉や壁ですら一瞬の熱量と衝撃で切断してしまう、本来は解体作業や建設工事に用いられる代物がそこに貼られていて、そして既に着火済みだった。

最高で2000度にまで達する超高熱の溶断テープの上に、ただスニーカーを履いただけの足を乗せていたらどうなるのか。結果など考えるまでもない。

「足なんて飾りですよオオオー！？」

何故か脳裏をよぎった偉い人には分からない台詞を叫びながら、霜見はアスファルト舗装の地面に向かって思い切りダイブした。

ボシュッ！という炸裂音が背後を通り過ぎ、振り返ると先ほどまで溶断テープの貼られていた軌道をきっちりなぞってアスファルト舗装が深々と抉り溶けていた。

「危ねえなコラアアア！俺のBパーツが吹っ飛ぶ寸前じゃねーか！こちららまだコアブロックスシステムなんざ搭載して無えんだよ！！」

起き上がり、立ち上がり、振り返って見回し、探す。

「あら？今でも吹っ飛ばないって、どういう反射神経してんのよ？」

居た。

駐車場に停めてあったファミリーカーの外。

しゃがみ込んで地面に静電気式の着火ツールを当てた、金髪碧眼の少女。

「ほんとね。もしかして予知能力者？」

車の後部スペースで夕食か夜食か、コンビニ弁当をつつくレベル
5も。

「……………」

助手席ではショートカットの少女がぼんやりとした濃霧のような
視線をこちらに流し込んでいた。

どう見ても、先ほどの四人組だ。

地面に設置されていた溶断テープといい、待ちの体勢でくつろぐ
彼女らといい、

——完全にこっちの動き読まれてんのかよっ！？

己の浅はかさというよりも彼女らの先読みの正確さに驚く。
自身の考えがバカ丸出しという事実にはあまり目を向けたくな
った。

しかしそう驚いて嘆いてばかりもいられない。のこのこと敵の手
中に舞い戻って来てしまった迂闊さを呪うよりも、この場をどう切
り抜けるのか、そこに思考を回す方が急務だ。

「——あれ？」

どうすつか……！？という焦り混じりの思考の中に、不意に一つ
の違和感が落ちる。

先ほど、三階の窓から顔を覗かせていた少女は全部で四人だった。
今、少女達の姿は、ファミリーカーの助手席に一人、後部に一人、
車外に一人——

——もう一人、どこ行っただ？

そう思った瞬間、霜見はざりつと靴が細かな砂利を踏む僅かな音を聞いた。

背後。疑問に対する答えが振り返った霜見の前に掲示されていた。右手を腰だめに引き、鋭い踏み込みでこちらの間合いを削る、短く揃えた髪 of 少女という姿で。

そういう事か、と全てに気付く。

車の方に注意を惹きつけておいての奇襲。地面に設置してあったトラップを避けられた時の為の、二重トラップ。

——クソッ、やられた……！

思い、霜見は逃げの選択肢がもはや完全に潰された事を悟る。

背後から来た少女と霜見との距離はおよそ二メートル。殴り合いの射程には遠いが、逃げる判断を下すには近すぎる。

やるっきゃねーのか？と軽く開いた拳を構え、霜見は視線を鋭く、迫り来る少女を観察した。

そして沸き上る疑問がまたも一つ。

近接戦の有利は経験と凶器を除けばほとんど体格差で決まる。リイチが五センチ違うだけで相当なアドバンテージを得られるし、体重で十キロも差がつけば圧倒するのは絶望的だ。

デカイ！強い of 方程式が成り立つ近接戦の常識の中、しかし今霜見の前に迫っている敵は明らかに小柄な少女だった。

霜見と比べ、二回り以上は体格が違っただろうか。彼女ら四人の中で見ても小柄な方だろう。

重力操作 of 応用で霜見は自身の能力半径内にある物体の重量を正確に知ることが出来る。重力子の振動を目算するのだが、それで割り出した少女の体重は43・78キログラム。

霜見はそう背の高い方ではないが、その割に筋肉量が多いので最

最終的な体重差は二十キログラム以上となる。

これほどの重量差なら、霜見が街角の不良相手に牽制で繰り出すジャブが一発でもヒットすれば勝負は決するだろう。

少女にとっては絶望的ともいえる体格差が、霜見との間にはある。だが。

駆ける足の速さに、少女は躊躇を見せない。その速さは、打撃の刺し合いの結末が自分の勝利であると確信している速さだ。

負ける訳が無い。否、勝って当然だと、そう思っている者が踏む、戻りの余地が無い突進の歩調。少女の速度は、彼女の心情を如実に表していた。

何故？

思い付く理由は一つだ。

——能力者、ね。近接系だろうな。ここまで距離を詰めてるって事は、その中でもかなり射程距離に難がありそうだ。しかも、破壊力には相当な自信がありそうだ。生身で当たりや、無事じゃすまねーよな。

考察終了。

得た情報と予測を頭の中に、対応策が思考を駆け巡る。身体に馴染ませた感覚が間合いを測り。

反射運動として覚えた動きが自然と体の各部に力を流し、タイミングを掴む為息を一つ。

「っ、」

吐き出す。

そのタイミングで。

こちらの間合いを削った勢いのまま打ち出される少女の右の腕を、

先端の拳を迂回した霜見の右手が掴み取った。

同時に霜見の身体が回転する。少女の身体を巻き込むような、縦軸にやや傾いた右回転。

もはや空振りした少女の腕を顔の側面に流し、開いた左腕で彼女のシャツ、その襟首を掴む。突進する彼女の勢いごとその身体を担ぎ上げ――

「、っ!？」

形としては一本背負いのそれに近い。

しかし少女の勢いを上乘せし、さらに左右の臂力を加えた変形型の投げは少女の身体を人が人を担いでいるとは思えないほどの勢いで動かす。

前方。距離にして五メートル。ファミリーカーの後部座席、開け放たれたスライド式ドアの中へと、

「ぎゃふう！」

叩き込んだ。

その結果を鑑みる事も無く霜見は駆け出す。

唯一の逃げ場、建物内へと。もはや避けようの無い戦闘の気配から一歩でも離れる為に。

結局は無意味な行為になると理解しつつも、動く足を止める事など霜見には出来なかった。

第7話 戦闘開始【イグナイト】

「ぎゃふう！」

悲鳴とも叫びともつかない声を上げたのはフレンドだった。

勢いよく投げ飛ばされた絹旗を受け止めようと立ち上がり、その小柄な慣性力に勝てず一緒に車の後部座席に倒れ込む金髪碧眼を冷めた目で見下ろして、麦野沈利はついていた弁当の最後の漬物を口にした。

コリコリと。漬物を租借する音を奥歯で噛み締めながら、麦野はあきれた声で、

「なにやってんのよ、あんたら」

「くう……、ちょっとミスちゃったって訳よ」

絹旗の身体を抱えながらフレンドは打ち付けた後頭部をさすりながら顔を起こした。

受け止めた絹旗は一本背負いのような形で投げられた為に上下逆さまの体勢になっており、フレンドの顔はその絹旗のちょうど太ももの間に位置している。

見えているのは一面の白。

幸いな事にそんなハプニングで悦ぶような奇態な趣味をフレンドは持ち合わせてはいなかった。

「絹旗ー。もう私にパンツ見せなくてもいいから、早く上から……
って、あら？ 気絶してるって訳よ」

フレンドは絹旗を上に乗せたまま身体を起こした。動く気配を見せない絹旗の身体を支え直して、今度の体勢はお姫さまだっこの様。膝上にのせた絹旗の肩を揺すりながら、フレンドは耳元で名前を呼び続けた。

「絹旗ー。起きるって訳よー」

ん…、という肺から漏れる空気が喉を振動させただけの音を出して、

「む、ぎの……、前より、足が、…超太く——」

脳天からのチョップが一瞬で絹旗の意識を呼び起こした。

「ちょ、超痛い！な、あ、あれ！？ここは……？」

「おっはよーん。よく眠れたかにゃー？どんな夢を見てたのかお姉さんに言ってみよっか？」

「麦野、目が超笑っていませんが、一体……？フレンド？」

絹旗に目を向けられたフレンドは曖昧に笑って視線を逸らした。

ふん、と。溜息なのか嘆息なのか、吐息を漏らした麦野は、まあいいわ、と言いつつコンビニのレジ袋に空になった弁当の容器を突っ込み、少しだけ真剣な口調で絹旗に向き直る。

「絹旗。あんた、自分が投げられたって覚えてる？」

え……？と絹旗は言い淀み、考える仕種。僅かな沈黙の後、霧中のような口調で絹旗は、

「奇襲を仕掛けたのは覚えてますね。そこで腕を捕まれて、手首

を返されて関節が極まって、これは超ヤバめ！？……と思ったら体がぐるんってなって……。そこまでですね」

ふうん？と麦野は絹旗の右手を掴んでまじまじと見ながら視線を尖らせた。

「何で、オフエンスアーマー窒素装甲が働かなかったのかしら？」

疑問を一つ。

ああ、という前置きを言葉の頭に、絹旗が回答を述べる。

「オフエンスアーマー窒素装甲の自動防御は、ある程度の速度を持つ物体にしか働きませんから。いつでも何でも弾き返していたら、私は常に超突風を発生させ続ける事になりますし、日常生活が超不便になりますから。普通に触れる分には、自動防御は無効なんです」

絹旗は右腕を、それを掴む麦野の手ごと彼女の視線の高さまで上げて、

「ほら、麦野の手も私を超触っています」

「なるほど、それで」

握った手首を見つめながら、麦野は言った。

三メートルの距離を飛んだ起点となったにも関わらず、細い腕には痣一つどころか掴まれた痕すら無い。

絹旗は気付いていないようだが、彼女のシャツの襟首には指の形に残ったしわがある。掴まれた跡だ。

——シャツで頸動脈を、ね。

絞めて、落とした。

気絶していたのはそういう訳だ。

自分が絞め落とすときはわざと後遺症が残る様にゆっくりとキツく締め上げるものだが、しかし相手に落とした感覚が残らないほど素早く、そして上手く締めるとなると相当な技量が求められる。

掴まれて投げられそうになったとしても絹旗の室素装甲なら打撃一つで体勢をぶち壊す事が出来る。

それが出来なかったのは、ひとえに、それらの複合された技量の数々が絹旗の思考から最善の判断を奪った結果だろう。

拳を警戒して腕を掴み、関節を極め、締め落として、投げる。絹旗の能力を知ってか知らずか、相手方の判断は全て最善の積み重ねと結果で構築されていた。

「ふうん……」

鋭く、まるで刀が研ぎ澄まされるかのように麦野の目が細まる。

「肩とか肘とかは？痛めてない？」

「ん？あー、いえ、別に。超普通です」

肩も肘も、関節はどこも無事。

極められたまま投げられるなんて無茶な事をされているのにも関わらず。下手な投げ方をされただけでも、普通はそのどちらかを痛めているものだが。

「……麦野？今日はやけに心配してくれますが、どうかしたんですか？」

「なによ、私がいつもは心配なんかしてないみたいに言っ

「え？」

「え？」

きよと言葉を返してしまった絹旗とフレンドが麦野にアイアンクローを極められている最中、助手席から身体を反転させてその様子を見ていた滝壺がぼつりと。

「すっかり逃げちゃったけど、いいの？」

「よくないわよ。ほら、あんた達も準備しなさい」

「くあ……、頭蓋骨が歪んだって訳よ」

「脳みその容量が超死滅した気がしますね……」

ゴキツと麦野の指が鳴ったので二人は急いで車外に飛び出した。

「超追いかけましょう！」

「イレギュラーに死のお届け物って訳よ！」

はあ。溜息が一つ。

「行くわよ、滝壺」

助手席から降りる滝壺とその他二人を引き連れて。

麦野はもう仕事を済ませた筈の廃墟へと再び足を向けた。

面倒だと思いつながら、しかし絹旗を軽く手玉に取ったあの男に多少の興味もあった。

表の世界の何者かなのか、はたまた他の暗部の人間か。本当にただの一般人なら興ざめもいいところだが。

まあ、何にしたところで、

「さっくり殺す事に、変わりなんてありやしないけどね」

●
●
●

研究施設の地下は、廊下が延々と続く窓の無い無機質な空間だった。

薄ぼやけた非常灯が夕暮れのような暗さを再現しているようで、実に不気味だ。

現在の階数は地下の四階。シャフトを使って一息に最下層まで降りればよかったのだが、そういう単純な道筋にはトラップが仕掛けられている事が多いので適当なところで途中下車したのだ。

それに。一気に降りて、もしそこが袋小路だった場合も危ない。引き返す選択肢も用意しておかなければ、いざという時に手詰まりになってしまう。

ルートの構築と追手の存在を常に気にかけてながら、霜見は一定の足取りで歩調を刻んでいた。

「でも、何でこんな事になってんだろなあ……。俺、確かコンビニ

にプリン買いに來ただけなのにな」

運が悪いにもほどがある。

ちよつと裏路地でショートカットしようとした途端に学園都市最強の一人に命を狙われた拳句、薄暗い研究施設を地下に向かつて逃走している。しかも地下に希望があるかといえは全然そんな事は無い。どうあがいても絶望。

不幸だと叫びながら走る男の都市伝説を聞いた事があるが、今の霜見もまったくそんな心境である。

呪いでも掛けられているのかと。

——呪いかあ……。まさか、メキシコに居た時のアステカの呪いか？ いや、あれは確か俺の息子が機能不全に陥るという呪いだった筈……。いやあ、あれはマジで恐ろしい呪いだったな。あの時に俺は絶望つて言葉の意味を知ったんだよ。エツーリとか言う人が居なかったらもうホントどうなってた事が……。

いやそうじゃなくて。

ほんの三年前に飛んで行った思考を元に戻して、霜見はちらりと背後を振り返った。追手の影や足音は無い。

ほっと一息ついた、瞬間だった。

ズバン！と、霜見の視界の中、背後から二メートルほどの位置を白い閃光が上下に貫いた。

原子崩しの光線だ。背筋に冷たいものが流れ、霜見は思わず表情が引き攣るのを感じていた。

うわー……。という呆れ声を上げながらも足は止めずに、

「階層ぶち抜いちまったよ。障害物とか関係ねえのな……」

流石はレベル5というところだろうか。

本当にシヤレにならないものを敵に回してしまった。後悔の味が口の中いっぱいに広がる。

——こんな芳醇な味わいらねえよ……。女将を出せ、女将を！

女将の代わりに脳裏に現れたのは、ブチコロス、という地獄からの手招きに似た地響きのような声だった。

霜見は胃の辺りがねじれる様な感覚を得た。

——あ痛でで……。ここから脱出する前に胃潰瘍になっちまうぞ、これじゃあよ。

とにかく逃げよう。思考はいつも単純で、視線を前に戻して歩調を速くしようとした時だ。

ズバン！ともう一発、背後の空間を衝撃が貫いた。

振り返るタイミングで、さらにもう一発がズバン！と。

さらに視界の中でもう一度閃光が貫いて、その痕跡を見るに、どうやら徐々にこちらとの距離を詰めて来ているようで、それが何を意味するのかと言つと——

「オイ、これ、盲撃ちじゃねーのかよ！？」

応えるように。

原子崩しの光線がこちらに迫って来て、ズババババ——！

「何で捕捉されてんだアアアアア！！？」

一気に歩調をトップギアへ入れた。

背後を振り返るとこちらの足跡を消し飛ばすかのように原子崩しの光線が上階より注いでいる。

走りの速度は落とさぬまま、霜見は目前に階下へと繋がる階段を見つけた。

障害物をすべて無視して突き抜ける原子崩しの攻撃に対して、階下へ潜る有効性がどれほどあるのか。自身でも疑問に思う霜見だが、この階に留まる有効性はもっと疑問なので取りあえず下に逃げ込もう。

という単純な発想。

ともあれ霜見は階段の方へ勢いよく飛び出そうとして、

「!？」

ズバン！と目前を突き抜けた光に、驚愕の色を表情に追加した。そして一瞬、思う事が一つ。

——足を……！

止められた。

次の攻撃地点が何処なのかと、考えるまでも無く、霜見は己の真上に視線を向けた。

光が、降る。

第8話 接触【コンタクト】

「命中した」

ぽつりと。そう言った滝壺の声を麦野は薄暗い研究施設のロビーで聞いた。

もはや制圧し切って、後は撤収するだけとなった施設の中に舞い戻ったのには理由がある。

目撃者の排除。

面倒な居残り残業だが、こんな裏路地の、表向きは閉鎖されていた研究施設に他の人間など居ないだろうとたかを括っていたのは自分だ。後始末の人員を呼ぶ前に、不手際は全て潰さなければいけない。

こんな事で“アイテム”の評判に傷をつけるのも馬鹿らしいというものだし、それ以前に学園都市の暗部に君臨する女王に手落ちなどあっていい筈もない。

証拠が残るなら消せばいい。

この世から、塵一つ残さずに。

幸いな事に、それ相応の能力を、自分は持っているのだから。

「命中ですか？では、今頃はあのイレギュラーは超死亡ですね。私をぶん投げたお礼に頭を吹っ飛ばしてやろうと思っていたのですが、残念です」

「滝壺と麦野のコンボ攻撃は強すぎて、ちょっと面白みに欠けるって訳よ」

背後から聞こえた声に振り向いて、麦野は不機嫌艘に言った。

「まだ生きてるわ」

は？という二つの声が重なる。

物静かな響きで、滝壺が敵の状態を告げた。

「また移動中。地下に向かっているよ」

「メルトダウナー原子崩しが命中して生きてるって、超意味が分からないのですが……？」

「私も分からないわよ。だから、これから確認しに行くの。直接叩き潰さないと死なないって、ゴキブリねまるで」

・
・
・

息を切らせた霜見が辿り着いたのは地下七階に位置する、広大な地下空間だった。

上階とは電源が独立しているのか、この部屋だけは青白い常備灯に照らされている。が。かといって明るいかと言えばそんな事も無く、せいぜい非常灯のオレンジ色が常備灯の白に取って代わっただけといった風情だ。

霜見は階段の上、少しだけ高い視点でその空間を見渡した。

部屋にパーティションや壁などは無く、四方を囲む壁に肋骨のように鉄筋が入っており、その骨で六メートルほどの高い位置にある天井と広大な部屋の全容を支えていた。

幾つものコンテナと作業機械が並んだその空間は何らかの目的を与えられて構築されたというよりも、多目的に活用できるように余分な要素を排した趣がある。

今は物置のように使われているが、必要なら一部をパーティションで仕切ってオフィスにしたり、または機材を並べて研究室にしたり、それこそ地下実験施設として十分な活用が出来るだけの耐久性は持っているだろう。

階段をゆつくりと降り、霜見は最下層のフロアに立った。階段を背後にした今の位置から見て右手側にはエレベーターの扉があり、対するように正面の向こう側にも大きく開け放たれた黒い空間があった。

霜見が青白い光に目を凝らすと、煙のように舞い上がる微細な埃がその穴の奥に吸い込まれていくのが分かる。気流が生じているのだ。

地上と繋がっているのか、という推測を胸に、霜見はその場から一步を踏み出した。足元で舞った埃が僅かに靴を汚すのを流し眼で確認し、さらにもう一步。

——貨物用のエレベーターか？

開け放たれた口の大きさからして、明らかに人間用ではない。というか、人間用は既に存在しているのだからわざわざもう一基を別に造る必要性も感じられない。

ならば人間以外の何かを運ぶ用途で、と考えるのが普通であり、そもそも地下に物資を運び込むのには特殊な例外を除いて必ず出入り口が必要であり——そう深く考察するでもなく霜見は思い浮かべた答えに頷きを得た。

しかしその貨物用エレベーターは今は使えない。

何故かというと、乗降口の扉とフレーム、中の客かご、そしてワイヤーや各種部品がそっくり取り外されて開け放たれた口の隣に置いてあるからだ。

何らかのトラブルがあったのだろうか。故障したエレベーターを修理する為に、点検や交換を行う上で邪魔になるものを排除して、それがそのままになっている。

気流が発生しているのも、この縦穴が障害物無く地上へ直通しているからだろう。

——ん？

ふと、違和感。

霜見は後ろを振り返り、煙のように舞い上がる埃を確認した。青白い光に浮かび上がる埃は、霜見の歩いた後をなぞって一筋の軌跡を描いている。

その、埃だ。

霜見が自身で作りに出した埃の軌道。軽い埃は人体が移動する気流のみで簡単に舞い上がり、それ自体は何ら不思議な事ではない。

視界を戻し、今度は前へ。

暗い縦穴に吸い込まれる、別の埃がある。

さて。この埃は、一体どこから舞い上がって来たのだろうか——

「あ。何か急に嫌な予感が——！」

慌てて踵を返した霜見は、眼前に迫る小さな拳を見た。

・
・
・

「原子崩しを防ぐ能力……。絹旗はそんな能力に心当たりある？」

地下へ至るエレベーターのかごの中、ふと傍らに出でた声に絹旗は目を向けた。視覚が認識するのは金髪碧眼の一回り大きな背丈。フレンダだ。

直接叩く、と麦野が判断を下してからすぐさま、四人は二手に別れていた。

組み合わせは麦野・滝壺と絹旗・フレンダ。前者のチームが階段からゆつくりと降り、後者はエレベーターで最下層に先回り。

獲物には緩急付けた原子崩しの攻撃が加えられている筈であり、もしかしたらこのエレベーターが地下に辿り着く前に勝負は決しているかもしれない。

「そうですね——」

障害物などまるで関係なく貫通する原子崩しの光を思い起こしながら、絹旗はフレンダの言葉にふむと頭を捻った。

「例えば。同じ系統の、電子操作系統の能力ならば可能性はあります」

が、

「超現実的ではありませんね。麦野の原子崩しは、電子をそのままぶち当てる超必殺技です。放電現象や荷電粒子などとは性質も威力も超違いますから」

絹旗は背を預けた客がこの床を見た。

一番最初、あのイレギュラーを追った麦野がエレベーターシャフトの中に放った攻撃で空いたらしい、天井から貫通する幾つかの風穴がそこにある。

「それこそ、超電磁砲^{レールガン}クラスの電子操作が出来なければ不可能でしょう」

「だったら、どうやって原子崩しを防いだって訳よ？」

「うーむ……。と頭に指をついて考える絹旗だが、正答は思い浮かばない。」

原子崩しとは、“粒子”又は“波形”のどちらかの性質を状況に応じて示す電子を、中間である“曖昧なまま”の状態に固定して強制的に操る能力だ。

曖昧なまま固定された電子は外部からの反応で動くことが無く、“留まる”という性質を持つようになる。この性質により擬似的な“壁”となった電子を光速で放出すると、電子は放たれた速度のまま対象を貫く、特殊な電子線となって標的に向かうこととなる。

その特性の前には物理的な防御など不可能だ。

銃弾すら簡単に弾き返す窒素装甲であるうと、その電子線の通過を防ぐことは出来ない。^{オフエンスアーマー}

だからこそその不可思議だ。

本来、避ける以外に対処法の無い“原子崩し”^{メルトダウン}の攻撃に対して、あのイレギュラーがどういった行動を取って無事を獲得したのか――

「超不思議です」

右の手首。

不意を突いたにも関わらず掴み取られ、投げられたその腕を見つめながら、しかし絹旗は言った。

「ですが、接近戦なら私の能力は超無敵ですから。先ほどは不覚を取りましたが、今度はそうはいきませんよ」

ごん、という振動と共にエレベーターが最下層に辿り着く。

「ま、そこは頼りにしてるって訳よ」

フレンダが降り、絹旗も後に続く。

最下層の地下七階は三百メートル四方の広大な一室だ。コンテナと機械が遮蔽物として乱立するその空間に、二人は一息。

「じゃ、さっそく出迎えの準備って訳よ」

溶断テープのロールを手に、フレンダが笑った。

・
・
・

準備、とは言っても。

相手が上層から下層へと潜る僅かな時間に何が出来るかといえば単にそこらに溶断テープを張り付けて罠とするだけで手一杯だった。フレンダは周囲に張り付けた溶断テープの位置を確認し、絹旗に

伝える。

爆弾があればより効果的な罠が仕掛けられただろうが、しかし今回はそもそもの目的が施設に残ったデータを無断回収しようとしていた外からの侵入者の排除だった為、そういった装備は持ち込んでいなかった。

それに何より、

「結局どんな装備を準備したところで、原子崩しがあればただのおもちやって訳よ」

それも理由の一つだ。

今使っている溶断テープも普段から常備しているから手元にあるだけで、たかだが数人の人間と用心棒で雇われた名も知らない能力者相手に、本格的な殲滅戦装備を用意するような非効率な手段を“アイテム”は取らない。

「レベルファイブ超能力者が居る時点で、こちら側の絶対的有利は超保証されたよ
うなものですからね」

何もかもを麦野に頼る、という訳ではないが。

襲撃にせよ防衛にせよ、戦力の主軸に座るのはやはり学園都市の第四位、麦野沈利である。それは揺るぎようも無い事実であり、チカラレベル5という能力の所以だ。

そして、同様にもう一人。

アイテムにはこと戦闘において絶大な力を発揮する能力者が居た。
絹旗最愛だ。

オフエンスアーマー彼女の持つ能力窒素装甲は、空気中の窒素を操って物理的な攻撃を軽く防いだり、何トンもある鉄の塊を投げ飛ばしたりといった絶

大な威力を発揮する。

自分で言うとおりの、接近戦ならほぼ無敵の能力だろう。
だが――

――一度、負けちゃってる訳よ。しかも奇襲の上で。

フレンドは先程の地上戦、背後からの奇襲から投げ飛ばされる絹旗の姿を思い浮かべようとして――

「白……」

何故かその後のあられもない姿で気絶した方の彼女を思い出していた。

「む。超どうかしめたか？」

「あ、いやいやいや。別に何でもないって訳よ」

「また私が不覚を取ってると思うなら、それは超大間違いですよ」

「そんなの、接近戦で絹旗に勝てる奴なんていないって訳よ。実際、麦野の原子崩しにも懐に入ってしまったえば速度差で圧倒できるんじゃないの？」

「超五分五分ですかね……。懐に入る前に、手足の二、三本持つて行かれた上に四つくらい風穴が開きそうですけど」

それは五分とは言わないんじゃないか？と思うフレンドだが、まあ、それがレベル4と5との絶対的な差であろう。

覆らないからこそその麦野沈利だ。絶対的とは彼女の為にある言葉

で間違いない。

ふむ、とフレンドは張り付けた溶断テープを適当な所で千切った。

『そろそろ、対象が地下に着くよ』

耳に付けていたイヤホンから聞こえた滝壺の声を聞き、フレンドは絹旗に視線を送った。絹旗も同様の視線を返してくる。

イヤホンの先に繋がっているのは携帯電話で、今は通話ではなく無線機能を使った双方向回線だ。一度の電波送信で多数の対象にメッセージを送れるので別行動を取る時などは多用している。

さて。

屈めていた腰を伸ばし、フレンドはぐるりと部屋を見渡した。コンテナや機械の位置とトラップの位置、部屋の構造をもう一度頭に取り込み、この檻の中でどう獲物を嬲ろうかと思いを回転させ、

——ん？てことは麦野の攻撃は全部避けられたって訳？

『油断しないですよ？』

今度は麦野の声が聞こえたので、フレンドは内心を跳ね上がらせた。

りよ、了解って訳よ。これも内心で応える。もう近くに来ているらしい相手に気配を察知されたら先回りした意味が無い為、返事は出来ない。

通信終了。との言葉と共に電波が途切れ、何が悪い訳でもないのにほっと胸を撫で下ろした。

その自身の隣では、絹旗が無言で両の拳を握り込んでいた。

——みなぎってる訳よ。

主に殺る気が。

程なくして。

かつん、という階段から反響した靴音を聞き、フレンドはコンテナの影に身を潜めた。

・
・
・

物陰に身を潜めた絹旗は、階段をゆっくりと降りてくる目標の獲物を視界におさめた。

こちらまで吐息の音は伝わらないが、肩の上下から随分と息を切らせている事が分かる。麦野の原子崩しから逃げに逃げまくったのだろうか。この最下層まで五体満足で来られただけでも賞賛ものだ。

——そう来なくては、超復讐の意味がありませんからね。

前に出ようとする気持ちを静かに心胆に溜め込んだまま、絹旗は拳の握りを確認する。

不覚を取ったこの拳を、今度こそはぶち当てる。そんな意気を体の内側で練り込みつつ、ふと、階段の上部で足を止めた獲物の様子を見て絹旗は僅かな驚きを胸に得た。

——まさか、バレてますか……？

こちらが先回りしている事が。

しかし獲物はそのまま引き返すでもなく、ゆっくりとした歩調でフロアに足を踏み入れた。

階段の前でぐるりと部屋を見渡す男の姿に、今度は親近感のような感覚を胸に得る。それは一体なにかというと、

——迂闊に入らない？ 見ているのは、部屋の構造と障害物の立地ですか……？

階段の上部で足を止めたのも高い位置から部屋の全容を確かめる為、かもしれない。

そして絹旗は、ゆるりと水が流れるかのような歩みで部屋の半ばまでを進む男の足運びを見た。

小刻みな歩調。床と靴底との距離を最小限に保ち、同時に靴音も消し去る歩みの仕方。

その一方で体幹は不気味なほどブレずに芯を貫き、小首の動きは最小限に周囲を見回している。

両手は軽く開いた状態。ゆるりと体の横に落としているが、常に一定の膂力を帯びた腕と肩は即座の行動に対応する為だろうか。

奇襲を警戒しつつ、さらに不意の出来事にも対応できるよう洗練された身の運び。視界の取り方。力の分配。

それはまさしく、

——暗部の人間の動きですか……？

いつ襲われるかも分からない命の駆け引きを日常とする者のそれと、よく似ていた。

いや、似ているところではない。既に習慣や癖の領域にまで馴染んだ体の動かし方は、普通の日常生活の中ではけして身に着く筈のないものだ。

——何者ですか、あなたは？

立ち止まるその男の背に疑問を覚え、しかし次の瞬間にはそんなくだらないものは吐き捨てる。

誰であろうと。何であろうと。今ここで消し去ってしまう人間の情報に価値や意味など無いのだから。

切り替えた思考に氷のような冷静さを纏わせて、絹旗は視界の中の男と呼吸を合わせた。合わせた呼吸の中に不意を見つけ出し、そこへ、先は不発に終わったこの拳を叩き込む。

接近戦の極意とは、相手の呼吸を知る事である。正面からの殴り合いなら能力で圧倒する事がほとんどだが、こういった静かな立ち上がりから敵を制圧する場合はその極意が有用な戦法となる。威力とレベルに自惚れた能力馬鹿と自分とは違う。

自負と自信。

磨き上げた技量と能力が、極めて冷静な思考回路を与えてくれる。そうして息を殺した絹旗の選ぶ判断の中、静かな呼吸の吐息が自身の耳元で、一回。二回。三回——

——しかし、あんな所で超何をやっているのでしょうか？

ふと、疑問。

獲物は解体されてただの通風孔と化している大型エレベーターのシャフト内をじっと見つめている。そんな物に気を取られて隙を作ってくれるならそれ以上は望むべくもないが、

——っ、と！

不意に、獲物が振り向いた。

僅かに覗いていた顔を引っ込め、絹旗は拳を強く握り込んだ。

超バレましたか！？という思いと共にコンパクトの鏡で死角に視線を覗かせると、しかし獲物の姿は変わらずそこにあり、顔も前に戻している。

一体、あの獲物は何を見ているのか……？

首の傾きから視線を予測し、その方向に絹旗も目をやると、そこには僅かだけ舞い上がる煙のような埃が青白い光に照らされてエレベーターシャフトの中へと吸い込まれている。

——気流？確かに、シャフトは外と超繋がっていますから……、

っ！？という声を詰まらせたような気付きの感覚の中、絹旗は獲物が歩いた道筋を見た。人間が移動した事による気流で、舞い上がった埃が一筋の道を作っている。それはあの獲物が巻き上げた埃だ。では、あのエレベーターシャフトの気流に吸い込まれる埃は、誰が巻き上げたのか。

——まさか、こんな超細かい埃を見つけて……！？

もう一度、直に覗き込んだ視界の中。あ、という声を発した男の背に、最低限の呼吸だけを合わせて絹旗は駆け出した。

「何か急に嫌な予感が——！」

いい勘してますね！

憎たらしい評価を胸中に。

振り返った獲物の表情に、窒素装甲で覆われた拳を、絹旗は遠慮なく叩き込んだ。

第9話 激突「オフェンスアーマー」

戦闘の立ち上がりは以前と全く同じ様相を見せた。

振り返った霜見の視界に迫る、少女の小柄な拳。危機的本能が告げる、ヤバイ！との声に従って拳を迂回した右手が突き出された相手の腕を取る。それと同時に切り込む、回転の拳動。

それは縦軸の捻りを入れた投げの動きだ。

少女の体が浮き、シャツの襟首を掴もうと左の手が伸び、しかしそこで事態は一変する。

「っ、！？」

右の手を掴まれた。

相手の腕を掴むこちらの右手がホールドされ、まるで万力のような握力で締め付けられる。

何だ、と戸惑うこちらの隙をこじ開けるように。腕を引いて身をこちらに寄せつつ、小柄な身が宙で身体を折り畳んだ。

もはや霜見の動きは投げの拳動には無い。

崩された体勢を戻す為に、まず霜見が必要としたのは距離だ。そして呼吸と時間。しかし現実には右手同士を固く繋いだ近接のシェイクハンドで、危機感が急転直下する中でさえ霜見の思考は、

——くっそ、手が柔らけーなオイ！さっき投げた時もあったけど、コイツまさか小学生じゃねーだろうな！？ぐあああ、やめるー！
！ロリコンは一昨年で卒業したんだ！今は巨乳のお姉さん系がマイトレンドで——！

基本的に霜見は馬鹿だった。

そんな馬鹿がバカなりに手を振り払おうと動く最中、空中で身を折りたたんだ彼女はその状態から一気に背を反らす様に片足を突き出した。

状態としては空中回し蹴り。体勢としてはライダーキック。小さな靴底が霜見の顔面に迫る。

——こいつ、パンツの见えない角度で蹴りを……！

霜見は馬鹿で、しかも男だった。

しかしその瞬間。相手の拘束を振り払った右手を、霜見はその勢いのまま背の方向に強引に振り回した。腕に引っ張られる様に身体が仰け反り、顔面へ至る蹴りの着地点が僅かにずれる。

霜見の、左肩へと。

「——！？」

チリツ、と。

実際は少女のつま先がほんの少しかすった程度だ。

しかし霜見が得たのは、徹甲弾に肩をぶち抜かれたのかと錯覚させられるほどの大衝撃だった。

ゴツ！という骨髄を伝わる衝撃音を直に鼓膜に聞きながら、霜見の身体は大きく弾き飛ぶ。きりもみ空中二回転捻り。悲鳴も上げられない勢いのまま霜見は背中から床に着地し、かろうじて取った受け身の体勢で足を上向きに振り上げ、未だ残る打撃の威力と上半身のバネを利用し、後方に一回転、ふらつく体を立ち上がらせる。

「ふん。そうでなくては超面白くありません」

涼しげな声で。霜見を蹴り飛ばした反動で体勢を崩すでもなく、少女の方は危なげも無く着地した。

肩に響く強い鈍痛に奥歯を噛みながら、霜見は相對距離十メートルの間合いでその彼女の顔を見た。

幼さの残る顔立ちだ。栗色のショートカットは活発そうな彼女の雰囲気によく似合っており、やたらとふわふわしたウール生地のようなワンピースがそこに可愛らしさを追加していて、正直な話――

――アリだな。少し昔に趣味を戻してみても……。

思ってみて。

しかし、無闇にこちらの危機管理意識の警鐘を鳴らして来る打撃の唸りが歴然とした脅威となって記憶にこびり付いている事に気付いて、ナシの方向で、と霜見は軽く頭を振った。

「つーか。やっぱりぶちかます系の能力者が……。喰らって無事に済むとは思ってなかったけど、掠っただけでコレってヤバいだろ、オイ。慰謝料請求すんぞ？」

口先を少女に向けながら、右の手は左の肩に置く。

指先の感覚で骨を確認すると、折れてはいないが、代わりとばかりに外れていた。痛い訳だ。重力操作で骨を浮かせて、右手で関節をはめ直す。

ぐざりつと妙な音がして骨は元ある位置に戻った。鈍く広がる痛みを表情に出さないよう気を付けながら、霜見は少女から目を放さない。

「火葬代ならこちら側で持つてあげますよ」

言い捨てて、少女は拳を握った。殺意と呼ぶにふさわしい覇気が視線から滲み出ている。

「言っておきますが、今のは超小手調べです。外では不覚を取って無様な姿を超晒しましたが、今度はそうはいきません」

そこまで言うと、少女はくすりと亀裂のような笑みを口元に浮かべた。

「分かりましたか？今、私が超手加減をした、と。蹴りをあなたの顔面にぶち込む事も、手を握りつぶす事も、やろうと思えば超出来たのです」

それをしなかったのは何故か、

「外と今と、これで勝敗は一对一ですね。借りは、これでチャラです」

声のトーンを一つ下げて。だから、と少女は握り込んだ拳で前傾姿勢の構えを取った。静から動へと、一瞬で移行できる前寄りの重心を持った構えだ。

距離を詰める疾走の前段階として、踏み切る左の足に力が入るのを霜見は見逃さなかった。一瞬。深く身を沈めた少女の身体が、足裏のコンクリートの床をぶちまいて、

「もう手加減はナシです」

加速した。

・
・
・

ドゴツ！という破碎の音を絹旗は背後に聞いていた。

それは足に纏わせたオフエンスアーマー窒素装甲が先程まで立っていたコンクリートの床をぶち割る音で、そこに炸裂した威力の反作用分だけ身体は前に加速する。十メートルの距離も、僅かに二歩。

「もう手加減はナシです」

握り込んだ拳を、次は、当てる。

一呼吸の合間に距離は無くなった。

突き出したのは右。肩を基礎に、肘を基点とした腕のカタパルトから打ち出された加減無い右のストレートが空気を鳴動させ、気流の嵐を生む。今度は掴まれない為に、過剰生成した腕の窒素装甲が周囲の空気をかき乱している。

その気配を察知したのか、もしくは先の拳のやり取りを踏襲したのか。獲物の男は今度はこちらの腕を掴みに来ようとはせず、軽いワンステップで身を飛ばした。

たんつと靴音を踏まれ、こちらの右手の外側に獲物は位置を変える。打ち抜く右手はこの時点で空振りが決定した。

獲物はさらに間合いを刻む。

その動きに、絹旗は呼吸を合わせる。

は、と吐き出した息で獲物の向かう先を予測。振り切った右腕の外側に回ったという事は、相手の狙いはこちらの背後と見て間違いない。

右か左か、どちらにせよこちらが相手の姿を追って振り返る動作にタイミングを合わせて距離を刻めば、その場所はこちらの背後となる。

そこから何か仕掛けてくるのか、それとも仕切り直しの間が欲しいだけなのか。ともあれ、相手の狙いは単純だ。

だから。

絹旗は動いた。

合わせた呼吸を乱す動きで。

身体を振らず、素早く引き戻した右腕だけを、今度は肘を基礎に加速させる。

形式は裏拳。拳動はジャブ。動作は高速。そこに窒素装甲の威力が加わり、

「が、あつ……！！」

獲物の身体はくの字に折れて吹き飛んだ。

およそ十七メートル。べぎんっ！という音がして、獲物の身体はその背後にあった鋼製のコンテナをひしゃげさせた。

あ、という空気漏れのような声を上げて獲物は泥人形のように倒れ込む。

「ふむ。なるほど、麦野が超ゴキブリと言いたくなる気持ち超分かりましたよ」

右手の手心えに若干の不満を感じ、絹旗は不機嫌そうに言葉尻を強めた。

打撃は、まともには入っていない。命中はしたが、その寸前に後ろに飛ばれて威力を殺された。肩に入れた手加減の一発よりは深く刺さったろうが、しかし直撃ではない事は明白だった。

「げほつ、うえ…、クソ、昼間のスパゲッティが這い出て来るかと思っただじゃねえかよ……。一皿1500円だったのに、もったいねえだろが、げほ、……」

その証拠に、獲物はまだ生きている。直撃ならば腹に風穴が空い

ている筈だ。

ぐらぐらと立ち上がる獲物の姿に、絹旗はもう一度嘆息。無防備な歩みで十七メートルを渡りながら、拳を握る。

「もう、超動かないでくださいよ？今日は早く帰って超見たいドラマがあるんですから——」

と。

「四、いや……三センチくらいか？その能力の射程は」

獲物の声が広い空間の中、ぼつりと響いた。

「あん？何だよ、そんなに不思議そうな顔するなよ。こっちは二回も喰らってんだ、そんなくらい分かるさ」

馬鹿な。

思いは、愕然というほどのものではないが、しかし止めを刺す為の歩みを止める程度には驚きを与えられた。

理屈なら分かる。

リーチの長さだ。

オフエンスアーマー

室素装甲は掌から僅か数センチ程度というごく短い有効範囲しか持たない能力であるが、しかしそれは逆に言えば有効範囲の数センチ分だけは確実に攻撃部位のリーチが伸びているという事であり、拳や蹴りを打ち抜いた瞬間を見れば打撃力の正体が本物の手足ではなくその数センチ先に展開した室素の壁であるという事実に気付く……かも、しれない。

だが。

リーチの長さを鮮明にするという事は、それはつまり攻撃が命中しているという状況であり、その場合、相手は死んでいるか悶絶し

ているかのどちらかしかない筈だ。

オフエンスアーマー

そんな状態で、この獲物は窒素装甲の有効範囲を見切った。それも、たった二回の接触で。

「……何者ですか、あなたは？」

ぬるりとした粘性を持って、吐き捨てた筈の疑問がもう一度心胆に落ちる。

「別に、何者でもねーよ」

ぐらついていた身体を何度かの呼吸で元の直立に戻し、獲物は言う。

「少年Aのモブキャラだよ、俺なんてーのはさ」

「そうは見えませんが。私の奇襲を回避けて、窒素装甲の直撃を超いなくて……。その格闘術、一朝一夕で身に着くものですか？」

「あー……、これはアレだよ、ほら、親父にハワイで習った？」

馬鹿にしてんのか。

それ以上は言葉を使わず、絹旗は止めた足を再び動かした。

詰まる間合いに速度を打ち込み、拳を加速させる。今度は左のストリートだが、顔面狙いの一発は寸前でかわされ、背後、既にひしやがっていたコンテナがさらに押し潰れて部屋の奥に吹っ飛んだ。

ドゴガゴゴ！と、絹旗が吹っ飛ばしたコンテナは床で一度バウンドし、奥に積まれていた幾つかのコンテナを積み木崩しのように巻き込んで轟音を立て、その音が鳴り止まない内、絹旗は横っ飛びに避けた獲物に更なる追い討ちを仕掛ける。

「は、あ！」

自身の頭上より高い位置から落とした踵がコンクリートの床をぶち抜く。獲物は寸前、バツタのような跳躍力で後ろに飛び、この攻撃も回避。

——いい瞬発力ですね。筋力も、見た目より超ありそうですし……。

面倒な相手だ。

それ故に、出来ればこのまま押し込んで短期で決着をつけたい所。

「それなら！」

落とした踵を基点に、もう片方の足をコンパスのように振った。

室素装甲の威力で床の表面は抉り削れ、そして碎かれる。弾き飛ばされたそのコンクリート片はまるで散弾のように前方いっぱい視界に撒き散らされた。

獲物の前後左右に回避の空間は無い。破片に叩かれ足を止めたところに本命の一発を叩き込み、ジ・エンド。それが絹旗の思い描いた展開だ。

「え？」

が、現実には描いた展開どおりの顛末を見せることは無かった。

絹旗の視線の先、獲物に直撃するコースを飛んだ破片は途中で弾け飛ぶ速度をゆると落として地面に落下、硬い音を立てた。他のコンクリート片は速度のままコンテナや作業機械に命中して派手な激突音を立てているのに、だ。

——やはり能力者ですか。

想定が事実^{メルトダウン}に変わる。

麦野の原子崩しを無効化した、正体不明の能力。

念動力か、電子操作のような能力か、一定の予測を胸に絹旗はさらに足を前へと押し出した。三步の踏み込みで間合いを削り取り、四歩目の足を地面に強力に接地させて軸足とし、

「ちえすとお！」

五歩目を振り回す、胴回し蹴り。

「つぶねえ！」

獲物は更に背後へ飛ぶが、そこで回避の空間は一時途切れる。コンテナだ。積み上げられた幾つものコンテナが壁として獲物の背後にそびえている。

「あ、ヤベ」

同時、その事実^{メルトダウン}に獲物も気づく。

だが遅い。その姿に、絹旗は口元に隙間のような笑みを浮かべた。即座。絹旗が見せたのは飛び込みの前傾姿勢だった。そのこちらに向けて、注視の構えを取った獲物に、絹旗はまたも笑み。

——背中が超がら空きです。

直後だった。

バシユッ、という炸裂音が獲物の背後のコンテナ群を百以上の破

片に分解したのは。

「な……！？」

鋼鉄の破片と化したコンテナが、雪崩のように崩れ落ちた。

第10話 退場【アーマーアウト】

部屋の物陰の一つから、フレンドは視線を覗かせていた。

コンクリートを打つちばなしにした大部屋の中央部で繰り広げられているのはイレギュラーと絹旗との戦闘だ。展開は終始、絹旗の攻勢で進んで、イレギュラーの男は回避と防戦に徹している。

だが。その一方で絹旗は逃げに徹するイレギュラーに決定的な打撃を未だに打ち込む事が出来ずにいた。命中した打撃は初手とその次の立ち回りで振ったジャブのような一発のみ。チャンスは初めの一撃だったものの、外で投げられた借りを返す為にその時は絹旗がわざと手加減している。

—— 案外、負けず嫌いな訳よ。

こと、戦闘においては。

接近戦に限れば無敵に近い能力を持つ自信とプライドが、あのイレギュラーに遅れをとった事実を否定しなかったのだらうと思う。

「ちえすとお！」

絹旗が回し蹴りを繰り出した。踏み出した速度を殺さぬよう、基点の足を踏む際にしっかりと腰を入れている。その為、身を前に出した加速度が蹴りに全て乗っており、半円を描くような大振りなモーションに反してそのスピードは常人では反応しきれないものになっている。

「つぶねえ！」

イレギュラーはその攻撃すら回避。

——ま、絹旗と格闘戦を繰り広げてる時点で普通じゃない訳よ。

イレギュラーの反応速度に賞賛一つ。

「あ、ヤベ」

そして、はいさよならと別れの挨拶も一つ。

フレンダはイレギュラーの背後にそびえるコンテナの壁へと続く、足元の溶断テープに火を付けた。

バシュツ、と一瞬で走ったテープの炸裂音がコンテナの山をバラバラに切断し、一瞬、ゴバツと破片が雨のように降り注ぐ。

いくら瞬発力に優れていようと、見えない背後からの攻撃に反応するのは難しい。しかも今回は絹旗がフェイントで飛びかかるような体制を見せて注意を引きつけていたので、直前で気配を察知する事も出来なかったろう。

「な……！？」

と。

息を詰めるような驚愕の声色が——絹旗の方から。

「ふえ、え？ちよ——！？」

続き、悲鳴のような声。

ドガガガ……！と鋼鉄の雪崩に巻き込まれたのは絹旗だ。

「え、ちょっと、何が……！？」

それはひどく異様な光景としてフレンダの目には映った。

急停車した車内で物体が慣性力のまま前方に滑るように、崩れたコンテナ片が全て絹旗の方へと流れたのだ。イレギュラーの横を通り過ぎ、その頭上を抜けて。

一つ一つが人間の身体大もあるような鋼鉄の破片が絹旗の華奢な身体を押し流し、叩き潰すかのような勢いでぶちまけられる。

不可解、としかフレンダにはその光景を表す事が出来なかった。

「よっしゃ今のうちに！」

あ、と呆けた息を吐いたのは、脱兎の如くイレギュラーの男が駆け出したからだだった。

逃げられる。

どうする。

フレンダは思考を転換、理解出来ぬものを取りあえずそのままに、逃走の体勢に入ったイレギュラーの行く先を見た。

一直線、向かうのはやはり階段の方向だ。逃がすか、この思いが次の行動を選択させる。

それは絹旗の救助ではなく、敵への追撃の一手。

—— あんなコンテナくらいじゃオフエンスアーマー窒素装甲は潰されない訳よ！

アイテムに属する能力者は誰もが規格外に近い強力な能力を持っている。

何でも貫く電子の矛や銃弾すら通さない絶対防御、銀河の果てまで居場所を追い続ける探知能力など。その力の理不尽さは一歩近くで見てきた自分最も理解している。

だから。

フレンダはコンテナの破片に巻き込まれた絹旗を心配などしていなかった。崩れたコンテナの山には一瞥すら向けず、暗がりから暗

がりへとフrendは素早く動く。

イレギュラーの意図を見、こちらの存在が気取られていない事を確認した。

溶断テープに着火する。あみだくじのように敷設していたテープの一本がイレギュラーの行く手を阻むように炸裂。

「うお、またかよ！クソ、どっかにもう一人居やがるな！」

正解。馬鹿に見えて観察力と勘は存外に優れているようだ。それに加えて、溶断テープの炸裂を避ける反射神経と瞬発力。しかも絹旗と格闘戦を繰り広げるような体術センスもある。

——正面からじゃ、ちよつと手に焼く相手な訳よ。

もう一本のテープを炸裂させて相手の視線を誘導し、その隙にこちらは位置を移動させる。

こういう手合いにはヒット&アウェイが一番効果的だ。
と。

ゴガン！とコンテナの破片を払いのけて、やっぱり無事だった絹旗がその残骸の中から飛び出した。

「ええい！超よくもやってくれましたね！」

「うお、復活した！？アレ！？おま、無傷ってどういう事だよ！」

「私の室素装甲に、物理攻撃など超通用しません！」
オフエンスアーマー

「うわ卑怯臭え！何だその能力！はっはー、でも弱点が無いと物語的に面白くないから主人公にはなれねえな！」

「いいんです！私のポジは超ヒロインと決まっていますので、弱点無しでも全く関係ありません！」

「んなぶちかまし系ヒロインが居てたまるか——！」

というやり取りの最中、何だかあのイレギュラーが喋り出すと微妙な空気になるなあと思いつつも、フレンドは与えられた役目をきっちり果たそうと気配を殺して次のポイントへ動いた。

大型の作業機械の陰で、位置としてはイレギュラーの男の背後十メートル。

「超新ジャンルです！」

絹旗が何を言っているかもはや分からなくなったので、フレンドは無言で手榴弾をイレギュラーの背中に投げつけた。指にピン器具を絡めて、投げる拳動でそれを引き抜きながら、数は両手に二つずつの計四つ。

かつんかつん、と手榴弾はコンクリートの床に硬質な音をたててイレギュラーの足元に落ち、

「は、え？ええ？」

しかしそこでは止まらずに、それどころか僅かに速度を増しながらまるで坂道を転がり落ちるかのようになり、からからから……と床を転がって奥へ、絹旗の方へと転がって行った。

「ちょ、フレ——」

ンダ。自分の名前を叫ぶ声は室内を揺るがす四連の爆裂音にかき消され、その代わりに響いたあられもない悲鳴が、

「ぎにゃー！？」

無論、窒素装甲がそんなもので剥がされる訳も無いので絹旗は無傷だが。

「ちょ、超どういう事ですか!？」

「ご、ごごめん!あれ、でも私はちゃんと……、って、あいつが居ない訳よ!」

手榴弾で発生した爆煙に紛れ、イレギュラーの姿が消えている。絹旗も同時にその事に気付いた。

「本当に、超ゴキブリですね。でも——!」

と、絹旗は近くにあったコンテナを無造作に蹴り付けた。快音を響かせて軽く吹き飛んだコンテナは、部屋の最奥にある階段の入り口の枠にめり込んで出入りを塞いでしまう。

「これで逃げ道は超ありません」

何ともなしに言い放つ絹旗の横顔に、なんて強引な、という念の混じる視線をフレンダは注いだ。

「別にいいでしょう?私は超手っ取り早く帰りたいのです」

それには同意しよう。

頷きを見せ、フレンダは軽く辺りを見回しつつ携帯を取り出した。階段の出入り口さえ塞いでしまえば逃げ道はエレベーターかリフトの取り外された貨物用エレベーターのどちらかしか残されていない。

エレベーターの扉が開くのを見逃す筈はないし、貨物用エレベーターの方はシャフトを登るしかないので使用はほぼ不可能。

——結局、部屋に閉じ込められたら完全に詰みな訳よ。

辺りの気配を窺いながら、フレンダは携帯の無線機能をオンに。双方向回線が繋がった事を回線音で確認し、

「滝壺ー、獲物の位置は……」

と、そこまで言った時だ。

ふと、目線を這わせた床に、おぼろな影が落ちているのを見た。自分の影と作業機械の影と、そして――

「隙ありィ！」

天井から落ちてきた、イレギュラーの影だった。

咄嗟に、体を仰け反らせるようにしてフレンダは背後へと飛んだ。ずだん！という着地音と共に瘦躯が目前に落ちたのはほぼ同時。

そして、

「しまっ、た！」

携帯電話が、

「ちよいと借りるぜ」

イレギュラーの手に。

「超そこを動くなゴキブリ男！」

携帯を。アイテムという組織の、情報の欠片が詰まった端末を敵

の手に奪われた焦りの中、声を荒げた絹旗が疾駆する気配をフレンドは感じ取る。

急転直下、という言葉が脳裏に浮かんた。

相手に逃げ道は無く、しかし今ここで行動を起こしたのはその相手側であり、展開に引き込まれているのはこちらだ。行動の連続が収束する様な感覚をフレンドは肌で感じていた。

さあ、という急かす様な自分の声が、頭の中で。

イレギュラーと、その手の携帯と、駆け出した絹旗と。

様々なものを視界の中に、フレンドの判断は距離を取る事だった。後ろ足へ力を込める。携帯は、そのまま置いておく事にした。絹旗がイレギュラーを叩き潰せば、携帯を奪われたミスは帳消しになる計算だ。

無理をして彼女の戦いに割り込む危険を冒す意味も、そのメリットも無い。の、だが。

「ふあ？」

動くより先に、足払いを喰らった。イレギュラーの男が軽く振った、まるで小石でも蹴るかのような右足で。

その動きがあまりにも自然で滑らかだった為、反応できた筈の速度に回避が間に合わず、バックステップの為に傾いた体勢が、ぐらり、

「は、！」

背中から床に激突する衝撃で息を吐き出せば、視界は九十度傾いた仰向け。天井にはおぼろげな室内灯があり、そしてもう一つ。

「え？」

二トン級の作業機械を持ち上げる、イレギュラーの姿が映った。

・
・
・

馬鹿な、と絹旗は目前の光景にそんな感想を漏らした。

今、彼女の目の前に迫っているのは黄色と黒のカラーリングが施された作業機械だ。大きさからして、本体重量は二トン強といったところか。

そんな大型重機が、こちらの眼前に飛んで来る。

——やはり、念動力……！？

飛来の根源は獲物の細腕だった。

今までのやりとりから、相手が何らかの能力者である事は確定している。

蹴り飛ばしたコンクリートを減速させた現象や、何故か自分を巻き込んだコンテナ片に、目標を大きくずれたフレンダの手榴弾。そして今、目前に來ている重機。

可能性としては念動力が最も正解に近いだろう。

だが。

それでもやはり疑問がある。

麦野の原子崩しメルトダウンを防いだという、その方法だ。

あの時、麦野は確かに命中したと言った。避けられたと言っているのなら、こんな疑問は浮かばなかったろう。念動力で自分の身体を動かせば、あの獲物の反応速度を持つてすれば麦野の攻撃を紙一重でかわす事も可能かもしれない。

しかし実際はそうではない。

麦野の攻撃は命中し、その上で相手は無傷なのだ。

念動力で防ぐ？まさか。原子崩しに干渉できるほどの念動力者など学園都市には存在しない。

ならばどうやって？分からないからこそその疑問だ。

背筋をなぞる様に沸き起こった薄気味の悪い疑念が、脳裏に達する。急に、追い詰められた筈の獲物の姿が、何か、恐ろしいものに見えた気がして、

——超不愉快ですね！

思いを払うかのような躍動の動きで、絹旗は床を転がった。ゴバツ、と空気を振動させて脇を通り抜けた重機が轟音を上げて床のコンクリートを削る。

——いくらオフエンスアーマー室素装甲でも、あんな超重たい物は受け止められませんからね。

回避の直後、絹旗は目を獲物の方へと。

「オツケ、その位置もらった！」

獲物の動きは、体勢を崩したこちらの隙を狙う攻勢の判断。しかしそれは戦闘における常套手段だ。故に、こちらも対処の方法を幾つか用意している。

それは例えば後ろの腰に潜ませたオートマグナムであったり、室素装甲を極限まで固めた全身防御であったりするのだが、さて今回はどいった手段が最も効果的か。

絹旗は研ぎ澄ました感覚で獲物の挙動を見据える。
時間すら遅く流れる様な意識集中の最中に獲物が足を後ろに振っ

た。蹴りの体勢。しかし距離は十四メートル弱と遠い。蹴り飛ばす様な物も近場には無い。

——何、を…、え、ちょ、ま、まさか……？

絹旗の、戦闘モードに切り替わった観察眼が後ろに振った獲物の足元を見た。安っぽい使い古しのスニーカーだ。そのスニーカーの前面部で、靴紐が解けている。

「んな、超馬鹿な！」

今日、一番の馬鹿なが出た。何故なら、獲物の足元から一直線に、スニーカーが飛んで来たからだ。

腰の後ろに回しかけた腕を止める。全身に漲らせた窒素装甲も平常に戻す。そしてようやく気付いた。

——コイツ、超馬鹿です！

駆け出しの体勢を作り、こちらに届いたスニーカーを手で払い――

「がつ、ああ！？」

弾き飛ばされた。

背後に何歩もたたらを踏み、体勢が崩れる。

感覚としては、数百キロもの重量にぶち当たったかのようなものだった。

一体、何が起きたのかと思った瞬間、視線を正面に戻した直後、背中から身体がぐにやりとした感触に捕らわれる。

「ふえ、え？」

背後へ視線を向けると、そこには何もない。

「……？」

何もないが、しかし視界が妙だ。
歪んでいる。

自分の背後に見える景色は貨物用エレベーターシャフトの入り口だが、その光景がまるで虫めがねを通した景色であるかのようにたわんで見えている。

「——重力レンズだよ」

声は、前から。

片方の靴を無くした格好で立つ獲物が、もはや勝負は終わりだと告げるように、

「重力つてのは、光にも作用するもんだ。弱い重力と強い重力の流れを一定方向に揃えて範囲展開すると、その内側を通過する光は重力面に添って屈折すんだってさ」

あのビン底はそう言った。と、獲物は言葉尻に追加する。何の事は分からないが、しかし理解した事は一つある。
相手の能力。

不明だった相手の特性が判明する。

それはつまり、あの獲物の口にした単語の通り、

「重力使い……！？」

気付いた瞬間、絹旗はこれまでの全ての現象に、納得、という言葉を得ていた。

どうやって麦野の原子崩し（メルトダウン）を防いだのか。

蹴り飛ばしたコンクリート片を減速させた方法に、コンテナをの雪崩を操った事も。重機を投げ飛ばせたのも、ただのスニーカーがあればどの衝撃を窒素装甲の上から与えたのかも。

重力という概念を持ち込んだ時、絹旗の思考は一瞬でそれらに対する明確な答えを導き出した。

どれもこれも、そう難しい現象ではなかった筈だ。

ならば何故、今までそんな単純な事に気付かなかったのか。

その答えもまた簡単だった。

「重力操作なんて、超聞いた事ありません！」

「そりゃあな。学園都市の中で、俺だけにしか無い能力だからな。互いに初対面って言うんなら知らなくても——」

向かい合う相手は腹立たしくニヤリと笑いながら、

「“超” トーゼンだろ？」

ムカついた。

今までで、多分、一番ムカついた。

すぐさまあのムカツク顔をぶつ飛ばしてやりたい衝動に駆られている。その一方で、あまりのムカつき具合に逆に冷静になってもいる。

小波と荒波が同時にうねりを返す心境を総括すると、

「待っててくださいね。その、超超超超ムカツク笑顔を今すぐしっ

ちやかめつちやかにしてあげますから」

そんな感じで。

絹旗は背後の感触から一步を踏み出そうとし、そして足を浮かせた真際、ぐいつと身体全体を引き込まれる感覚を得た。接地していた足もその感覚に引かれ、肩から背中全体を背後に預けるような形で身体が浮き上がる。

「これ、は？」

何だ。

までも、疑問。

思考を回し、疑問に答えを見出す為、絹旗は考えた。

——相手の能力は重力操作で、私が今、超捕まっているのも重力レンズで……、っ！

そして気付いた。

何故なら、その原理の説明は今、相手の方がしたばかりだったからだ。

——重力レンズ。弱い重力と強い重力との境界面で、光は超屈折する……！

自分を受け止めた、ぐにやりとした感覚が、つまりは弱い重力だ。では、その弱い重力と共に展開されている強い重力は何処にあるのか。光はそれら二つの重力面の境目で屈折しているのだ。

それはつまり、

——弱い重力面の裏側に、強い重力の発生する力場が

思考はそこまで途切れた。

重力レンズに引き込まれる身体が、弱い重力面の境界線を越えて、強い重力面に触れたから。重力はこちらを背後へと引き込む方向に作用し、ぐると視界が回る様な感覚で、そしてそのまま一息に、

「ち、超覚えて——！！」

ぶっ飛んだ。

第11話 撃退「ブラックアウト」

どばんっ！という空気の鳴動が暗い室内に響き渡り、駆け抜けた気流が疾風のように開け放しのエレベーターシャフトから外界へと逃げて行った。

疾風は三つの現象を伴う。

ぎにやあああ！という、猫がこむら返りを起こして叫んでいるかのような発声が一つと、遠く消えていくその声に付随するドップラー効果が一つ。エレベーターシャフト内を駆け昇るガゴドコガンゴンガン……！という激突音の連続が最後の一つだ。

「……き、絹旗が、ぶっ飛んで行った、訳よ……」

啞然の含みが乗る声色で、自分がすっ転ばした金髪碧眼がその状況を説明してくれた。分かり易くていい説明だと霜見は思う。さらにその声の情報によると、あのぶちかまし系能力者は絹旗と言っらしい。既にぶっ飛ばしてしまったので今更な感じに過去の情報ではあるが。

霜見が行った攻撃は、ごく単純なものだった。

あの能力者、絹旗というらしい彼女を重力レンズで弾き出してエレベーターシャフトに叩き込み、そのシャフト内に更に仕込んでおいた上向きの重力レンズで外に追い出す。

それだけだ。

予想以上にシャフトに傾斜がついていたので内壁にかなりぶつかって外へ飛び出たようだが、

——まあ、頑丈そうな奴だし、大丈夫だろ。

オフエンスアーマーとか言っていたか、彼女の能力は。装甲^{アーマー}というくらいなのだから体の周囲に何らかの力場を発生させる能力だろう。重機を用いて運搬するようなコンテナの破片を頭からかぶって無傷なのだから、こちら側から心配をかける必要は無いと思える。

——しかし、うまくハマってくれたよなあ、あのぶちかまし……絹旗だっけ？

実際問題、あの仕掛けで勝負が決まるかどうかは半ば以上が賭けだった。急場の仕掛けが通用する可能性などたかが知れているし、何より仕込みが雑だ。

——重力レンズで光を屈折させてちゃ罠の意味ねーよな。

万全を期すなら、重力レンズと局所重力波の二層の歪曲面で光を透過させる所だ。

そんな偽装も出来ずに展開させた重力レンズに相手がうまく飛び込んでくれたのは幸運としか言いようが無い。日頃の行いが良かったのかもしれない。ロリ信仰から巨乳神の崇拜へと信仰をシフトさせたのが大きかったのだろう。

ともあれ、今の状況において一番重要な事実^{事実}は敵の一人を撃破したという事に間違い無い。

手強い敵だった。というか、面倒な敵だった。物理攻撃無効とかどんなチートだよと。自身の歴代敵ランキングの中でもトップ10入りは確実だろう。経験値もがっぽり入ったに違いない。

てれれれつてれー。と、そんなレベルアップ音が聞こえて来やしないかと霜見は耳を澄ませたが、そんな事がある筈は無かった。しかし代わりに聞こえた音がある。

衣擦れと息遣いの音。

さらに、床をこする靴音と、小さな金属音だ。

「ん、あ？」

音に気を向けて、そして気付く。

脱兎のように駆け出す金髪の後ろ姿に。

「くそ、ここまでやって逃がす、……か？」

さらに気付く。

足元に残された置き土産に。円筒状の小さな金属の塊に。

それは何だ。

手榴弾だ。

そして悟った。

内部のバネで弾き飛ばされた留め金が、床に落ちる硬質的な音が最後に聞こえた金属音の正体だったと。

破片式のものより一回り小型の形状はよく見知っている。それは、

「スタングレネード！？」

光と音が、言葉を掻き消した。

・
・
・

絹旗がぶっ飛ばされるのを、フレンドは傾いた視界の中に見ていた。

それは、状況としてはひどく奇異なものだった。

スニーカーを投げつけられてよろけた絹旗がイレギュラーの男と何やら言葉を交わしたと思ったら、急にその小柄な身体が背後へ加速したのだ。

叫び声を長く長く引き延ばしながら、小柄な体軀はその後ろに口を開けていた貨物エレベーターのシャフトの中へと消えて行った。激突音のようなものが上向きに駆け昇って行ったから、おそらくはあの加速度のまま地上までぶっ飛んだのだろう。

その状況を見たフレンドには、啞然、という表情以外を浮かべる事が出来なかった。

「……き、絹旗が、ぶっ飛んで行った、訳よ……」

出てきた感想も、見たままを口にするのみ。
そして。

倒れた姿勢のまま、フレンドは見た。

あの絹旗を外まで軽くぶっ飛ばした能力者の姿を。
記憶を呼び起こす。絹旗とこの男との会話に聞き取った、ある単語を。

——重力……。

絹旗は言っていた。この男の事を、重力使い、と。

フレンドが思い浮かべたのは“？”という言葉にすらならない疑問だけだった。

意味が分からない、というのではない。

重力を操る能力者の事を、絹旗は重力使いと呼んだのだ。それは分かる。理解は自身の内側に確かに存在する。

ただ、想像が出来なかった。

重力を操る能力というものが、一体どういうものなのか。
何故なら。学園都市二三〇万種類の能力の中に、そのような特性を持つ能力など他に存在しないからだ。

——いや、まあ、私が知らないだけって事もある訳だけど。

しかし自分は、この学園都市の能力者と渡り合うために、何より、暗部組織の中で生き残っていくために様々な能力についての情報に目を通している。

発電能力。精神観応能力。水流操作。空間移動。気流操作。発火能力。

数を上げれば霧が無いほどに。種類と特性、特徴や危険性、威力、射程、弱点、頭の痛くなるような論文も読むし、大嫌いな勉強もこれについてだけは欠かさない。

なのにな。

その自分の情報の中に、重力操作なんていう能力は存在しない。聞いた事が無い。そんな論文を読んだ覚えも無い。

思考の選択肢に無い回答に、フレンダの頭は混乱していた。

——重力って、どんな能力な訳よ！？

重力。

物体間に生じる、引力現象。

歴然とした物理現象ではあるが、地球上で生活する上ではその現象は物事の前提や摂理、常識のレベルにまで昇華される。

物体は上から下へと落ちて、それ以外の結果は発生し得ないのだから。

その現象を、常識を、あの能力者は捻じ曲げた。
漠然としたイメージを持つことしか出来ないが、絹旗をぶっ飛ばした重力レンズなる現象といい、重機やコンテナを軽く操る事とい

い、この男の能力強度はかなりの高レベルであろう。

適当な装備だけで臨んだ自分が太刀打ち出来る相手では無い事は明白だ。

——ああもう、こんな奴くらい勝手に逃がして帰れば良かった訳よ！

思うが、しかし後悔は先に立つてはくれない。泣き言を言っても始まらないのは世の常か。

ともあれフレンダはこれから先の展開と動き方を頭の中でシミュレートした。けして戦おうとは思わない。思考のギアは既に“逃げよう”ヘシフトチェンジしている。

暖機運転は必要無い。早速の行動としてフレンダは自身のあらゆる気配を殺した。

声を殺し、音を殺し、動きを殺し。

緩慢ではあるが的確な動きで、スカートの中からスタングレネードを取り出す。音がしないようそつと床に置いて、安全装置のピンに指を絡める。

一呼吸。

両手足に力を入れ、ゆっくりとした動きで体勢を整える。

「、」

吸音を一つ、スタングレネードのピンを抜き、手足のバネを一気に解放させて駆け出した。

あ？という声が背後から聞こえ、しかし振り向く事はない。逃げる時は一気に駆け抜けるのが鉄則だ。

そして三秒。

留め金の外れたスタングレネードの内部でマグネシウムの混合物が急激な爆燃の反応を起こすのに必要な時間だ。

「スタングレネード!?」

音と光が部屋を満たすのを、背中と閉じた瞼越しに感じつつ、フレンドは速度を落とさぬまま一気に駆けた。

向かう先はエレベーターだ。

エレベーターは自分と絹旗が使ってから一度も動いていないので、客かごはそのまま扉の向こうにある筈。相手が不意を突かれて足を止めている間に乗り込めれば地上までは一息に行ける。

その回避ルートへと、背中越しの光でばやけた視界の中ではあと十メートル。

行ける訳よ!?!と、逃げ込むには少し長い距離に歯噛みするフレンドに、

「――!」

動きの接続をシュミレートした上で、不意を突き、なおかつ先に動き出した自分にあっさりと、イレギュラーの吐息が背後に追いついた。

マズイ。

どうする。

考える。

エレベーターまでは残り六メートルを切った。飛び込みとスライディングでも何とか届く距離。

――いける!

袖口から、最後の切り札を取り出す。

それは、単発式の拳銃だ。弾丸の装填数は二発。引き金二回で使い物にならなくなる代物だが、それ故に小型で服のどのような場所

にも隠せる。その上構造は単純で故障しにくいという利点もある。確実性。この都市の闇の中で生き抜くに、二番目に必要な事だ。一番目は何か、

——結局、最後は運任せな訳よ！

ダッシュの速度はそのままに、構え、一発。

たん、という小口径の軽い音が響き、銃弾がエレベーターの扉の開閉ボタンを弾いた。

扉が開き、中の薄明かりが漏れる。

残りの一発は後ろのイレギュラーへの足止めだ。防御か回避か、何らかの反応を取ってくればその隙にエレベーターに乗り込める。だからフレンダは銃の撃鉄を親指で引き、

「待て、逃がすか金髪貧乳！」

「誰が貧乳な訳よ——！」

勢い良く振り向いた。

銃を向け、引き金を引く。しかし。

「見てからじゃ遅えよ！」

それよりも速く、イレギュラーの速度が飛び込んできた。

後ろに伸ばした腕の内側へと。

軽い銃声は、イレギュラーの頭の後ろで標的を失ったまま鳴り響く。

あ、という声が口から漏れた。視線の交差が、一瞬。すれ違う。

同時に、イレギュラーの身体が前方に飛び出した。引っ張られる

ように、自らの身体も。

何と思えば首がイレギュラーの手に掴まれている。もつれた足が
たたらを踏んで引かれ、前のめりに体勢が崩れ、イレギュラーの手
がこちらの頭を肩でロックし、これはまるで――

「飛び込み式の、ネックブリーカー……！？」

正解。そんな声が、顔のすぐ横から。

駆け出しの加速度を得た飛び込みは、その声に対する抵抗も反応
もフレンダに許しはしなかった。

「！」

ゴギン！という衝撃が頭蓋を上下に貫いた。

第12話 反撃の契機【カウンターレポート】

自分以外に動く者の居なくなった地下室で霜見は一人、勝ち名乗りのように両手を掲げていた。

「はあ」

そして溜息をついた。

「何で俺、こんな地下室で女の子をぶちのめして気絶させてんだろ……」

実際は正当防衛なのだが。しかし状況だけを見れば薄暗い地下室で女の子を気絶させているという現行犯逮捕的な場面な訳で。

「最悪だ。プリン食べたかっただけなのに完全に犯罪者みてーになつてるよ。しかも状況的には性犯罪だよ。こっから本番が始まるパターンだよ」

下を向けばそこには気絶して倒れる小柄な体軀がある。髪は染色ではない長い金髪だ。見た感じではドイツ系の血が濃いだろうか。日系も混じっているかも。学園都市はワールドワイドな街だな。

「……歳下か？」

どうだろうか。ひとまず、胸は貧乳だ。裸にしてみなければ実際のところは分からないが、霜見の観察眼はほぼ正確なバストサイズを見抜くことが出来る。自身の姉をして魔眼と言わしめたこの目に

間違いは無い筈だ。

まあ、体格は個人差なので一定基準以上ではあまり判断材料にならない。

顔立ちはどうか。高校生にしては少し幼いが、美人と形容しても問題無い。

恐らくは、年下だろう。少なくとも同年代なのは間違いない。

しかしそんな少女が無防備に倒れて吐息をもらしているという状況に霜見は何を思うのか、

「――触るのはナシだ」

霜見はこれでも紳士のつもりだった。

「――覗くのはアリか？」

しかし変態だった。

更に馬鹿でもある霜見はその女の子のうつ伏せのスカートに手を伸ばしかけ、

「いやいやいや。待て、これは、どうだ？ナシか？」

自問自答。

ナシだろうか。

いやどうだろう。

しかしそれをするとは本格的に犯罪だが。

だが対象は気を失っているのでこちらが下手を打たない限りは証拠も事実も残らない事になる。

つまり立証不可能という事だ。

「――ご、合法的にパンチラが……！いやしかし、いいのか！？こ

んな感じで俺はいいのか！？男としてどーよ！？

「お、俺は……！」

二秒後。

「やっぱり俺は男なんだなあ……」

霜見の目は男として黒いストッキング越しの白を映していた。イエス白！と拳を握り込み、

「俺は本物の馬鹿か！」

自己ツツコミを入れた。

コンクリート打ちっぱなしの床は冷たく硬く、熱暴走する頭部による頭突きの音がよく響いた。

そしてすぐさま、そんな時間の余裕は無い事を思い出す。

打ちつけた額をさすりつつ、こほん、と咳払いをして、一息。自分自身の本来のノリを取り戻そう。今のあれはアレだ、もう一人の自分だ。主に十三、四歳くらいの年ごろに多くの少女少女達の頭の中に形成されるもう一人の自分が未だに自我を保っているのだ。暗黒面だ。黒歴史とも言っ。

「おさまれ、第二の俺……、というか息子よ」

深呼吸。

多少の気を持ち直した霜見は、ポケットから先ほどその彼女から奪い取った携帯電話を取り出した。

二つ折りのピンク色を開くと、画面は無線の周波数登録のリスト

を表示していた。登録に個人名などが載っていれば上出来だったが、さすがにそんな事はない。

リストに表示されているのはただ一つ、

「アイテム？」

そう名付けられた周波数の分類グループだけだった。

そこに登録されている周波数は三つだ。アイテムa～cまでの名前がリストに並んでいた。この携帯自身の周波数を加えると、つまり相手は四人組みの集団という事になる。

霜見は思い出していた。

外で見た、彼女らのメンバー構成を。

「コイツとさつき飛ばしたぶちかまし……絹旗、だっけか？それと、あとはレベル5だろ？もう一人、すげー眠そうな目した奴がいたけど、あれで全部か……？」

指折り数えれば外で見た人影はそれだけだ。その四人がアイテムという謎の集団で間違いないだろう。

有益な情報だ。少なくとも、隠れていた五人目が後ろから現れて襲ってくるというような展開の可能性は薄くなった。

さらに情報を求めて携帯を操作する霜見だが、

「やっぱアドレス帳にやロックが掛ってんなあ。電話の履歴もそうだし……メールもか。ユーザ情報には花山花子……。携帯に偽名かよ」

内部情報を外に漏らさないようにするというのはどのような組織においても重要視される事だが、この少女の携帯はその辺りが特に徹底している。よく見れば携帯の側面には内部の回路を一発でシヨ

ートさせる自爆スイッチのようなもので付いていて、こんな機能は通常の市場へ流れる携帯電話には絶対に搭載される事はない。

「特注品、ね。どこの特殊部隊だよコイツ」

傍らで倒れる少女に向けて、疑問一つ。少女は答えず、静かな吐息だけを閑散とした空間に響かせている。

「つーか、気絶した女の子の携帯を弄り回す俺って一体……」

どこで方向性を誤ったのか。キャラ付けを間違えた気がする。自分は今もって凡庸な奴だった筈なのにな……。――

はあ。今日はため息が多い。

ともあれ気を取り直して。

霜見は考えた。

どうやって逃げるか、または切り抜けるか。

――レベル5と正面切るのは無理だからなあ……。貨物エレベーターのシャフトをよじ登ってもいいけど、

問題が一つ。

足元の金髪碧眼が連絡を取ろうとした相手だ。

先ほど、手榴弾の炸裂に紛れて重力操作で天井に張り付き、相手の目を誤魔化そうとした霜見の眼下、この金髪貧乳はこちらの姿をよく探しもせずに携帯を使い、こう言ったのだ。

（滝壺ー、獲物の位置は）

滝壺。

獲物。

位置。

そこで相手の不意を突く為に飛び下りたので得られた単語は三つだけだが、それは霜見にとつては非常に有用な情報だった。

まずは名前だ。滝壺、という単語は恐らく通信の受け手の名前だろう。

そして、獲物。これは自分の事で間違いなく、その自分の位置をこの場に居ない相手に聞くといい事が一体どういう事実を示しているのか……。

それにだ。こちらを見失った彼女らは、探索こそ満足にしようとはしなかったが周囲の警戒は十分に行っていたように見える。出入り口まで塞いで、さらに周囲を警戒するという事は、つまり自分がこの部屋にまだ残っていると思っっている上での行動だ。

——レベル5のビーム攻撃が追っかけて来た時から薄々感じちゃいたが……。

十中八九、アイテムという四人組の中には追跡能力者が居る。滝壺、というのがそうなのだろう。

透視かその他の精神系能力者かまでは分からないが、階層を隔てた相手に追撃を喰らわし、地下に居るこちらの動きを特定できると仲間内で認識されているくらいだ、相当強力な能力者と見ていい。

——問題は、その滝壺ってのがあのメガ粒子砲なのかどうかだよな。

レベル5、メルトダウン原子崩し。

出来れば、あの強烈な殺気とはこれからの生涯において無関係でありたい。

「えーと、電子を固定して加速させるとかそういう能力だろ、確か

……」

分類的には電子操作系統に属する能力である。

厄介だな、と霜見は思った。

電子操作は学園都市に存在する数多の能力の中で、最も多彩な現象を引き起こす能力の一つだ。電流や電磁波、磁力にローレンツ力など。応用分野が幅広い分、能力の特性は多岐に渡る。

特に、今。自分が相手にしているのは学園都市に七人しか存在しない最大級の非常識、超能力者の一人だ。
レベルファイブ

——脳波をキャッチするとか、生体電流を追いかけるとか、チートな事して来そうだよなあ……。

そうなると逃げ切るのは絶望的に難しくなるが、

「ん、待てよ」

ふと、気付きの感覚を得て、霜見は倒れる金髪を見下ろした。

地下に降りて待ち伏せをしていたのは、この金髪と絹旗というぶちかまし系の二人だった。

その事実、霜見は疑問を一つ。

——何で、追跡能力者自身が追いかけて来なかったんだ？

相手はわざわざ、四人という構成を半分にしてこちらを追って来た。その中に追跡能力者も混ぜずに。

非効率な方法だ。

目的とする対象は自分一人という少人数。さらにこの場所での出会いは完全に偶然であり、それは向こう側にも分かりきった事実だ。偶然、という事は、その出会いに必然性が無いと言う事。

意図的な接触が考えられない以上、こちら側がトラップを用意した可能性を警戒する意味は無いのだから、追跡能力を持つ人物が直接追って来るのが効率的な手段だろう。

——けど、そうはしなかった。わざわざ二人組みに人数をバラして追って来た。

その理由を考えるならば、それはつまり——

「——戦力の均等化と、逃げ道を潰す為か」

可能性として最も高いのはそれだ。

区切りが良いから二人ずつにしました、なんて事は無いだろう。

そう考えると追跡能力者が直接階下まで来なかった理由も自ずと分かってくる。要するに、身の安全の為だ。

「深追いして、追跡能力者が撃破されるのを恐れてるって訳か？俺の事を虫だゴキブリだって散々に言ってるのに、随分と……」

警戒されている。

否、正確には万全を期している、という見方が正解か。

待ち伏せしていた二人の反応からして、自分が過大な敵と認識されていない事は明白だ。

なのに戦力を均等化して追い詰めるという事は、組織の中に少なくとも一人は安全な場所に置いておきたい人物、いや、“能力”があるという事だ。

逆に、地下まで追いかけてきた二人組をいくら撃破したところでアイテムなる組織の行動に支障を与える事は出来ないという事でもある。

「レベル5が追跡能力を持ってるなら、ソイツが直に追って来る筈だよな」

自分の身の安全を優先したという見方もある。

だが、相手は学園都市二三〇万人の中で最強に数えられる七人の、第四位だ。

外での様子を見た限りではかなり自分の能力に自信を持っているようだったし、強い能力者の持つ特徴として自尊心も人一倍だろう。そんな超能力者が、わざわざ自分の身の安全の為に人員を裂くだろうか。この、自分一人の為に。

あまり、想像できない話だ。

ならば何故、四人組を二つのグループに割った？

考えられるのは一つ。原子崩しと共に居るもう一人が、そのレベル5の能力者ですら惜しむような貴重かつ強力な能力を持っているという事。

それが、追跡能力。

上階でレベル5が撃つ光線の照準が甘かったのもそのせいだろう。口伝のタイムラグが照準と射撃との間に誤差を生み出した、と。そういう事だ。

「障害物無視のレベル5と追跡能力、ね」

敵の全容が見えてきた。

レベル5を筆頭とし、組織運用の中核に追跡能力を置き、武闘派の構成員で纏めた少数精鋭の組織。

それが、アイテム。そういう名の、謎の組織。

問答無用のレベル5や絹旗という能力者、気絶している金髪碧眼の設置していたトラップからして、かなりの過激派組織に違いない。

——うーわ……。

予想の斜め上に行く事実、少し霜見は頭を抱えた。

「面倒くせえ……。何で、そんなヤバそうなのと追いかけてっこしてんだよ、俺……」

しかも構成員の半分を倒してしまった。報復は確実だ。ヤバイ。プリンのせいで俺の人生がヤバイ。

いや、ポジティブに考えよう、と霜見は思った。敵はあと半分だけなのだと。

そして霜見は気を落ちつける為、もう一度だけ黒越しの淡い白を目に映した。ハイルパンスト！両手を握り込んでバンザイの姿勢。

「……ふう。よし、冷静になった。えっと、なんだ、つまり敵はあと二人で、片方はレベル5のメガ粒子砲で、もう片方は追跡能力者だ。……多分」

この情報は全て、想像と推理と予測から来たまったくの仮説なのだが、まあ今までそういう前提だったのでそれはもうそういう事でさて。

これらの事から分かるのは、レベル5に追跡能力は無いという事実と、追跡能力者本人に高い戦闘能力が無いという可能性だ。僅かな光明だが、しかし生き延びる道があるとすればそこを突くしかない。

——追跡能力さえ潰しちまえば、逃げ切れる目も出てくるって事だな。

逆に言えば、追跡能力をどうにかしない限り自分は追われ続けるという事でもある。

「どうすっかなあ……」

と、霜見は足元、片方を失ったスニーカーを見た。無くなった方のスニーカーは重力レンズに絹旗という少女を叩き込む為、実際の何百倍という強重力波を纏わせて投げつけた。

たった四百グラムの靴に数トン強の重量が乗る訳だ。

重力波を纏った靴は物体との接触で多大な衝撃を生むが、しかし物体に力が作用すると同等の反作用が生じるというのは物理の常識である。なので多分、スニーカーは激突の衝撃でボロクズみたいな繊維の欠片に分解されてその辺に落ちている事だろう。探すだけ無駄である。

「……」

片方だけスニーカーを履いた状態ではバランスが悪く満足に動く事が出来ない為、霜見は仕方なくもう片方も脱いでその辺に投げ捨てた。靴下もだ。布系の繊維質は摩擦が弱いので素早い移動には適さない。そうなると当然のように足は素足となり、コンクリートのひんやりとした感触を足裏に感じつつ、霜見は無性に、何だコレ、という寂寥感に駆られた。

「俺、何でこんな所で裸足になって命懸けてんだ……？」

プリンを買いに裏道に入ったただけなのに。人生の歯車など、どこで狂うか分かったものではない。

「……………はあ。——んじゃ、」

と、地面を足裏で軽く叩いた。

その瞬間、ぐらりと構造物が小さく揺れ、霜見の視線が上を向いた。まるで階層を隔てた何かを見るように。射抜くように。

そうして上向けた視線に言葉を一つ、

「やるか」

反撃の、行動を。

第13話 異変【プリモニッション】

非常灯の明かりのみが点く、薄暗い部屋がある。

研究施設の地下四階。エレベーターの正面に位置する事務室のよ
うな部屋だ。

その部屋の中、黄色の携帯電話を手にぼんやりと画面を見つめる
瞳がある。

滝壺だ。

「……」

パソコンの置かれている事務机の上、腰を降ろした滝壺が眠そう
な半目で見ているのは無線通信の画面だった。

たった今、フレンドからの通信があった画面である。しかしその
通信表示は既に閉ざされていた。

通信の内容は、その全てをフレンドが語り終わる前に途切れたの
で分からない。

分からないが、しかし仕事の完了報告では無いだろう。そういつ
た事は自分にはなく麦野に伝達されるべきものだ。

地下にあるAIM拡散力場の反応は依然として三つのままである
し、二手に別れる前にかんりの意気込みを見せていた絹旗がターゲ
ットを生かしておくとも思えない。ぶつ切れになった通信の閉鎖表
示が物語るのは、地下の空間が交戦中であるという事だ。

ならば、どうするか。

滝壺は考えた。

連絡を折り返えそうかとも思うが、未だ交戦中ならば不用意な通
信は避けるべきだろうか。交戦中の状況下で自分に通信が来た理由
も気になるが。

一つ分かるのは、助けを求める通信ではないだろうという事。自分に直接的な戦闘力が無い事はアイテム内の誰もが知っている。

ならば、と考えるに恐らくはターゲットの位置捕捉の依頼だったのだろう。同じ部屋の中であの二人がむざむざターゲットの姿を見失うものだろうか、と、多少の疑問はあるが。

相手がよほどうまく出し抜いたのか。しかし相対したのがフレンドなのだと考えるとそれもそれで彼女らしいなんて考えが頭をよぎり、少し苦笑。

「あ」

と。

麦野にオシオキされつつも微妙に喜び顔のフレンドを軽く想像していた滝壺の意識下、能力にて捉えていたAIM拡散力場の反応が高速で移動した。

移動は地下から始まり、一直線に地上へと至る。さらに加速度を衰えさせる事の無いまま、そのAIM拡散力場は地上へ出た。飛び去る。

瞬間、という時間の中で遠ざかって行ったAIM拡散力場の持ち主は、自分のよく知る人物だ。

「……きぬはた？」

アイテムの中で二番目に強力な攻撃力を持った女の子の名前だった。

何があったのか。

ていうかやられたのか。

絹旗に高速で空を飛ぶ能力は無かった筈なので、多分その想像通りなのだろうと思う。彼女にしては珍しい失態だ。

そう思っている間に絹旗のAIM拡散力場の反応は学区を一つ飛

び越えて落着してしまった。大丈夫だろうか。旅客機から飛び降りても軽傷で済む^{オフエンスアーマー}窒素装甲の防御性能ならば、自分が心配する必要はあまり無いのだが。

AIM拡散力場も健在なので生きているのは確かだろう。後で拾いにいかなきゃと思いつながら、しかしそれよりも先に考えるべき事があると滝壺は意識を絹旗から離れた。

「フレンダが、まだターゲットと一緒に居る……！」

滝壺は腰掛けていた机から地面に飛び降りた。たんつ、と直地の靴音を硬く響かせ、意識を階下へと。

ターゲットとフレンダのAIM拡散力場は今もなおその場にあり、今最も危険なのはフレンダだ。

原因と勝敗はともあれその場を離れた絹旗にはこれ以上の危機は存在しない。落着のダメージが心配だが、彼女自身の能力を考慮すればそう大きな心配ではないだろう。

ならば、今の状況で最も憂慮すべきなのは絹旗をそのような状況に追い込んだターゲットと、フレンダが未だ共に居る事だ。

加勢に行くか。

否。

今から階段を駆け下りたのでは時間が掛る。エレベーターはターゲットにこちらの存在を気取られる。

考え得る最善は一つだ。

「むぎのに、」

連絡を取ること。

なので滝壺は、無線通信のリストから彼女の持つ端末の周波数を表示させた。呼び出そうとする。

研究所全体が軽い横揺れに見舞われたのは、まさにその時だった。

・
・
・

麦野は研究施設の最上階に居た。

立ちの姿勢のまま腰を曲げて叩いているのは、施設のメインデーターベースに唯一繋がっている情報端末のキーボードである。

端末のディスプレイには、ここを引き払った研究員達が残して行ったデータが表示されていた。

数ページ分の情報を流し読みした麦野は深々と溜息をつき、折り曲げていた腰を戻した。

っ、と伸び。

は、と息を吐き、

「残ってるのは、外部機関の活動記録だけね」

つまらなそうに呟いた。

学園都市外部の研究施設で行われた実験開発の記録は、当然ながら全てこの学園都市の施設に集められる。

それら記録の中には研究日程や実験の成否などが含まれる事もあるが、そのほとんどはどうでもいような施設の活動日誌だ。

「火曜の日替わりはピラニアの煮付けからピラルクの蒲焼に変更になりました、って何の報告よ……」

画面には現地の河川でピラルクを釣り上げた瞬間を激写した写真がアップロードされており、勢いで河に落ちたらしい白衣姿が写真

の奥で溺れている。写真には注釈でその白衣姿を指し“ピラニア包囲中”とあるが、この研究員はその後どうなったのだろうか。ともあれどうでもいい情報だ。

「あのゴキブリフナムシもこのデータを狙ってんのかと思ったけど、そういう訳じゃなさそうね」

乱入してきたあの男が本当に偶然居合わせただけの馬鹿なのかどうか。当初の予定に無い事態が起こったので念の為に確認してみたが、どうやら無駄な働きだったらしい。

こんな情報ぐらい、まあ、情報セキュリティの観点で言えば気軽に漏らしていいという訳では無いが、かと言って重要かと問われれば決してそんな事も無い。

わざわざ第二陣の工作員を差し向けてまで奪取に動く意味など無いに等しい。その程度の情報の為に、この“アイテム”とぶつかってくる人間など居る筈もない。

「ったく。じゃあ、やっぱりただの通りすがりの馬鹿だったって訳？」

チツ、と舌打ちしつつデスクの上に腰を落とす。

腕の時計を見れば既に時刻は八時前だ。

まったく、と不機嫌な呟きを生み、つまらない仕事ね、と一人続ける。

もともと、今回の仕事は他組織への見せしめの意味合いが強かった。

破棄施設のデータを漁りに来るハイエナかネズミみたいな連中など、ひと山いくらの雑魚に任せていればいいのだ。

事実、施設に侵入していた連中は満足な対能力者用の装備など持たず、ボディガードで雇っていた能力者もレベル3程度のゴミだっ

た。

どう考えてもアイテムが直々に動くような仕事ではないが、それでもこうやって派手に潰して見せる事で、他の、馬鹿な事を考えている連中への牽制と威嚇とする。

面倒な話だが、定期的に晒し者を作っておかないとすぐに面倒な騒ぎをおこす奴が現れるのだ。

それだけ、学園都市の中に詰まる情報、技術は魅力的なのだろう。外の世界の、二十年は未来を歩むとされる学園都市の技術。未来の情報とはかくも魅了的なものという事か。

「はあ、めんどクサ」

情報を表示していた端末を閉じ、麦野は立ち上がった。

早く帰りたい欲求が思考を支配しているせいかな、この無意味な残業時間がひどく苦痛だ。絹旗とフレンドはもうあの男を始末しただろうか。溜め録りしていたドラマが見たい。

ひとまず二人に連絡を取ってみるか、麦野はポケットから携帯を取り出す。

「、！？」

不意に、視界が揺れた。

・
・
・

ふらつ、と。視界が揺れた。

ぐらりと建物全体が歪むように軋みを上げ、揺れる。

振動で机の足がカタカタと床を叩き、ペン立ての中の筆記用具は小刻みに音を立てる。

滝壺自身も軽くだたらを踏み、あ、という声と共に机に片手をついた。

反射的、というか本能的にであろうか、滝壺は自然と腕に力を入れて足を床に踏ん張っていたが、しかし揺れに対する重心の移動がうまくいかずに尻餅をつく形で床に座り込んでしまった。

っ、という呼吸の抜ける音が喉奥から漏れる。

手近なデスクの脚を掴み、揺れに対して身構えるが、予想に反して揺れはたった一度で収まっていた。

「？」

拍子抜けするような感覚。その後疑問が来る。

——何、今の？

地震、だろうか。

「……違う」

地震とは、構造物の立つ地盤そのものが振動する自然現象だ。それによる地震波は幾つか種類があり、それぞれに異なる周期を持って構造物に作用する。

その場合、構造物は基礎部位から断続的連続的な揺れを得る事になる。よほど、小さな地震ならば話は別だが。

対して。

今の揺れは構造物に対して一度の振動しか与えなかった。揺れの規模はそれなりにあったのにも関わらず、その後の揺れは無い。

それは振動というよりも、衝撃に近い揺れ方だ。急激な発生と急速な鎮静化は爆破のそれとよく似ているが、しかし破砕音や爆発音までは届いて来ていない。

——発生源は、地下？

地下の最下層フロアには未だにターゲットが居る。原因があるとするれば、そこだろう。

彼が何らかの能力者である事は判明しているのだ。どのような能力なのかまでは把握できていないが、少なくとも、レベル5の原始^{マルチ}崩しを防ぎ、絹旗を退けるほどには強力な能力者の筈だ。

——何か、仕掛けてくる。

能力によって感知しているフレンダの拡散力場が、先ほどから全く移動していない。死んではないが、恐らくは気絶ないし行動不能の状態に陥っているのだろう。なのに連絡が来ないのは、前者なのか携帯を奪われているからなのか。

ともあれ、最下層での戦闘はもう終了したと見るべきだ。

絹旗とフレンダの負け、という想像もしていなかった結末だった
が。

「——、一体、何者なの……？」

今更かもしれないが、思う。

たった数十分でアイテムの半数を無力化して見せた敵の正体は、
何かと。

分らない。

事前情報は無い。

ならば、警戒しなければいけなかった。

事実、万全を期すに値する戦闘力を向こうは有していた。それを侮った事を誰のせいにする事も出来ない。自分だっても数の分で片が付くと思っていたのだから。

しかしその一方で思う事もある。こんな事になるなら、と。

「初めから使っておくべきだった」

ジャージのポケットから取り出したケースを見つめ、滝壺はぼつりと呟いた。

・
・
・

どうしようか、と。

滝壺は取り出した小さなケースを見つめた。透明なプラスチックのケースには少量の白い粉末が入っている。

粉末は、体晶という。正確には、能力体結晶。

吸引すると夢の国へ行ってしまうクスリではないが、拒絶反応による能力の暴走を意図的に引き起こす作用を持っているので、違う意味で別世界にトリップ出来るクスリだ。

能力の暴走とは、即ち脳回路の過剰使用である。

強制的な超過駆動状態に陥った脳機能は一時的に能力者の性能を引き上げるが、しかし大抵の場合は負荷に堪えられず崩壊するか能力の制御を手放して暴走するかのものである。

能力者本人へのダメージは少なく見積もっても深刻だし、そんな状態ではまともに能力は発揮されない。

しかしながら数の母集団が二三〇万もあると、中には例外的に暴走状態の方が良好な結果を残せる能力者というものが存在する。

滝壺理后も、そういった希少な二三〇万分の一の能力者の一人であつた。

能力の名は、A I M ストーカー。

記憶したA I M 拡散力場の検索と追跡を行う能力であり、有効範囲はあらゆる能力の中でも最大級の太陽系規模。

その能力は今も僅かに発動中である。

もともと、今日はこの廃棄施設に残されたデータを盗みに来た外部組織のエージェントとその護衛に雇われた能力者の排除が目的だつた。

その為、数時間前に体晶は一度使っている。

しかし時間経過で体晶の効果は薄れていくので、それに伴い自然と自身の能力も効果が弱まっていく。

今の状態は能力切れかけの低速運転だ。カバーできる範囲は一区域程度にまで狭まっているし、A I M 拡散力場の察知感覚もはつきり言つて不明瞭である。トッピギアの暴走状態ならば、位置捕捉だけではなく対象の能力把握や自分だけの現実への逆流によって能力の根幹部分に揺さぶりをかける事も不可能ではないのだが。

「――」

もう一度体晶を使って、ターゲットの正確な捕捉と力場干渉からの能力捕捉を仕掛けてみるべきだろうか。

しかし体晶は使う度に身体へ多大な負担をかける。

その為、日に幾度もの使用は避けるよう麦野には言われているし、そもそも体晶の使用自体も通常は麦野の判断を仰ぐ事になる。

「そつだ、むぎの」

思い出す。

研究所が揺れる前に、何をしようとしていたのかを。

絹旗に続き、フレンダまでもがターゲットに撃破された可能性がある。

急ぎ、麦野へ連絡を取る必要がある状況だ。
と、

「あれ？」

気付いた。

持っていた携帯が、手元に無い事に。何故だ。答えは一瞬で脳裏に来る。原因は明白だった。

「尻餅をついたときに、落とした？」

床に視線を這わせて辺りを見回すが、非常灯の淡い光は床にまでは届いていない。短時間で携帯ほどの小さな物体を見つける事は困難だ。

「……………」

少しだけ途方に暮れる。

まあ、麦野は上階に居るので直接合流すればいいだけの話なのだが。

仕方ない、と滝壺は腰を上げた。

現場に携帯を捨てたままにはしておけないので、明日にはもう一度この場に来なければいけない。自分達が引き払った後で片付けに来る、暗部の下部組織に回収を依頼してもいいだろうか。

と、その時だ。

「！」

滝壺の知覚が、ターゲットの移動を捉えた。

・
・
・

——速い……！

移動を始めたターゲットの速度に、滝壺は違和感にも似た感覚を得ていた。

ターゲットは最下層の空間から一直線の軌道を持って上階へと昇っている。速さの例えでも、何かの比喻でもなく、本当に“一直線”だ。

エレベーターやそのシャフトを使っている訳では無い。エレベーターは今までフレンダ達が使ってから一度も起動していないし、そもそも座標が違うからだ。

座標的に見れば、ターゲットは廊下の曲がり角の奥にある空間を昇っている。

恐らくは、階段。

しかしこのビルの階段は直角を組み合わせた幾何学螺旋の構造をしており、要するにきわめて普通の階段である。ならば必然、階層の間にある踊り場で方向転換する筈であり、どれほど無駄な動きを廃した所でその分の速度低下は避けられず、また、その動きの軌道を自分の能力が見落とすとは考えられない。体晶の効果が薄れてきた今の状態であっても、それは然りだ。

なのにターゲットは一直線の軌道で速度低下もせず、どころか徐々に加速しながら上へと昇ってくる。

——能力者……。

判明している事実には、しかし滝壺は僅かに身を硬くした。

位置の捕捉は出来ているが、その能力の詳細は未だ不明なのだ。

ターゲットはその不明な能力を使い、絹旗とフレンダの二人を相手にしてそれを撃退している。自分が知り得る限り、アイテムによって最大の被害だ。

しかもターゲットはその上で尚、その身を健在としている。

有り体に言って、強敵だ。

「……」

ジャージの懷に手を入れ、滝壺は黒の鉄塊を取り出した。

拳銃。

護身用に、と麦野に持たされていた銃はレディースの小ぶりなものだったが、自分の手にはそれでも少しばかり大きい。今まで、ほとんど使う機会がなかった銃身は新品のように輝いていた。

は、と吐き出す息が重く、

「——どっち？」

僅かな緊張を含む呟きはターゲットの移動の意味を見据えるものだった。

回避するのか、反撃に出てくるのか、そのどちらだろうか。

ターゲットは移動する。

最下層の地下七階を出て、六階を越し、五階を通過する。

そのAIM拡散力場の反応に、知らず滝壺は息を潜めた。

——四、階で、……っ!?

止まる。

否、移動はまだ続いている。

一切の足音も気配も無く、しかし自身の能力はターゲットが廊下を移動していると告げている。

向かう先を違う事無く、またもや一直線に近い軌道で、緩まぬ速度がそのまま、

——この、部屋に……!?

来る。

——来た!

外側からぶち破られた扉が派手な音を立て、部屋の中に影が飛び込む。

「っ」

反射的に上げた腕は、既に引き金を引いていた。
短く乾いた、二発の銃声が部屋に響く。

第14話 接敵【エンゲージ】

表面のひしゃげた貨物コンテナがある。

地下七階の階段入り口を塞ぐ正方形のコンテナだ。

コンテナは、一辺が三メートル近くもある巨大なものであり、霜見が表面を拳で叩くと、予想以上に重たい響きが返ってくる。通常の規格のコンテナよりも外層が厚くなっているのだ。

研究機材などを運搬するコンテナは、耐衝撃性を高めるために物によつては数センチ以上の鋼鉄を切り出して作られる事もある。その上で中身を固定し衝撃吸収材を充填されて運ばれるのが一般的だ。このコンテナは空のようだが、それでも重量は二トン以上。これを軽々と蹴り飛ばした少女の能力に、霜見は深々と息をついた。

「あんな非常識な奴と、まともにやり合わなくて良かったよなあ……」

眩きを生みつつ、霜見は無造作に右手を動かした。コンテナを右の脇にどけるかのような動きだ。しかし指先はコンテナそのものには触れず、

「よつと」

発生した重力波がコンテナを右へと転がせた。

頭の中で処理するのは見えない腕が物体を掴むイメージだ。能力に目覚めてからこれまで、全ての演算はこうした想像上のイメージで処理してき。

実際には膨大な計算式を一瞬で紐解いているのだとビン底眼鏡の研究員は言っていたが、自分でそれを意識する事はほとんど無い。

「……うわ」

転がせたコンテナの裏は内側に激しく裂けて破れており、ここが打撃のポイントだったのだなと思わせられる。

破れたコンテナの破片は激突の衝撃で階段下の床にこぼれており、厚さ十五ミリのアルミ合金が無残な姿を晒していた。

そういえば打撃のニアミスを二発ほど身に受けたが、

「本当に手加減してくれてたんだなあ……」

感謝しよう、と霜見はコンテナに向けて手を合わせた。コンテナは御仏ではないし彼女も死んでなどいないだろうが。

ともあれ、と霜見は一步を踏み出す。

入り口の枠を超え、一際に薄暗い昇り階段のある空間へと。

「んー」

見上げる。

階段は、直角の螺旋を描くような一般的なものだ。

五段ほどの小さな階段がまずあり、そこに接続された踊り場で百八十度の方向転換をして、次の十段階で次の階へと至る。

その連続が最上階まで延々と続いている。

霜見が見たのはその階段の中央部だ。螺旋を描く階段の中央は、真っ直ぐに最上階まで開かれた吹き抜けとなっていた。三十メートル以上の縦の空間だ。

「つと」

その空間の端に、つまりは踊り場から接続する十段階の裏に、

霜見は“着地”した。

重力操作。

自分自身に作用する重力の方向を百八十度反転させ、天地を入れ替える。世界全体が自分を中心に回転するようなイメージだ。

階段の裏側は今斜めに傾いた地面として霜見の足下にある。

その縁から下へと、実際には上方へ吹き抜けていた空間が足元に縦の広がりを見せている。

その広がり縁へ霜見は立つ。

意外と表面に付着していた埃で足が滑るなあ、と思いつつも斜めの重心移動で体勢を整えつつ眼下に暗闇と非常灯の明かりを見ながら、

「じゃあ、行くか」

飛び降りた。

・
・
・

「よつと」

霜見は落ちる身体を宙で反転させた。

たんつ、と裸足の足裏で音無く着地したのは正常な重力の働く、未だ地下のフロアだった。足元の表記は四階。

己の能力で四階分の距離を一息に“落ちた”霜見は、その階の到達と同時に重力方向を正常に戻し、宙返りをもって着地したのだ。

着地の瞬間に身を沈ませた霜見は視線を前に、縮み込む足と背骨

をバネとして、

「っ」

駆け出した。

姿勢は低い。地面スレスレまでの前傾姿勢はフロアの各窓からこちらの影が見えないようにという理由からだ。

時おり床を指で弾いてバランスを取り、また、その弾きを起点に加速と細かな重心移動を行って走りの方向を決定していく。こうする事で通常姿勢における瞬発力と反応速度を保ちつつ相手の視界より下に身を置くことが出来、さらに重心が低いので足音が出にくい。様々な用途に便利だが傍目からは非常にキモい動きの連続となるこの走り方を、霜見は忍者走りと呼んでいた。命名は霜見で、編み出したのも霜見で、ならば霜見走りと名付けるのが正確なのかもしれないがそれはともかく別の話だ。

何はともあれ忍者走りで行く霜見が目指しているのは、廊下の奥を曲がった左手、エレベーターの正面に位置する部屋である。

目指す理由は簡単だ。

——そこに、小柄な人間が一人、

居る。

それは既に確認して、判明している事実だ。

だから霜見は走る。その人間が移動せぬ内に。最上階に見つけたもう一人が動き出す前に。

非常灯の明かりの中、床に落ちる影の中を這うように低く、衣擦れも呼吸も、足音も消した無音で霜見は行く。

——見えた！

エレベーターの階層表示の光が。
ならば、その正面に位置する部屋が目的地だ。

「っ、」

床を右の指で弾く。

バランスとタイミングを取り、背の方に回していた左手に力を込めた。ずっと、その手に掴んでいた物がある。それを改めて確認する。

さて、という前置きを胸に。

「！」

見えた扉に、霜見は踏み込んだ。

・
・
・

ばがんっ！という破砕の音を滝壺は聞いた。

扉が外から弾け飛び、激突音に似たその衝撃の音に、無意識の内に滝壺は銃を構えた腕を跳ね上げていた。

引き金に添えた指が動き、

「っ！」

想像よりもずっと軽かった引き金が、たたんっ、と連続二回で音を鳴らした。

反動で跳ねた腕が持ち上がり、手の平には痺れのような感覚が残る。

女性の筋力でも楽に扱えるよう設計されている小型の拳銃だが、二連射の反動は少々強く腕に響いたようだ。

しかし、

「あれは……！？」

部屋に飛び込んで来た物。

それは人ではなかった。

それは、非常灯と室内の暗さを映す、くすんだ銀色の物体だった。ひしゃげ、ねじ切られたかのような断面を持つ五十センチ四方程度の、金属の塊だ。

——ターゲットじゃ、ない！？

何故。そして、何処。

同時に思考に來た疑問に、しまった、と自身の迂闊を滝壺は思った。

AIMストーカーの能力が発揮されるのは体晶の効果が持続している間だ。体晶の効力が弱まると、自動的に能力も弱体化して正確な位置捕捉は難しくなる。能力の発動維持も同じくだ。

ターゲットが一直線にこの部屋にやって來た事と、扉を開けるのではなくぶち破るという派手な演出に動揺して、位置捕捉を乱してしまった。

鈍る能力感覚を維持するのは普段よりも集中力が居る。

その隙を知ってか知らずか、

「！」

伏せに近い走りの姿勢で、人影が部屋に飛び込んできた。
しまった、という思いがもう一度反芻する。

室内戦での戦いは如何にして相手を待つかが重要になる。自分に有利な状況をどのように構築し、どのような誘導で相手を誘い込むか。

そういった罫と状況の仕掛けはフレンダ辺りが得意で、自分にはあまり知識が無いが、しかし扉前での待ち伏せが有効なのは知っている。

だからこうやって机の影に身を隠しつつも扉を視界の中に収める形で身を置いているのだが、

——腕が……！

跳ね上がっている。

先ほどの射撃だ。

反動で腕が視線の高さにまで跳ねており、照準が付けられない。

その間にも飛び込んできた人影は風が通り抜ける様な速さで視界を横切り、正面にあるデスクの裏、こちら死角へと入り込んだ。

瞬間、色が舞う。

薄明りを反射する、白の色だ。

それはデスクの上の書類の束で、デスクの裏に飛んだターゲットが咄嗟に撒いた物だろう。

目線が、一瞬だけ奪われる。

「……！」

幾度目かの、しまった、を滝壺は思った。

ここは人間の視力が落ちる薄暗闇であり、相手はこちらの死角に入り込んでいる。ならば、頼るのは視界による確認ではなく能力による位置捕捉だ。

滝壺は焦りそうになる心を無理にでも落ち着かせ、能力に意識を集中させた。素早く、しかし繊細に、相手の位置を割り出す。

何処だ。

視線を奪われた一瞬で、既にターゲットの反応は正面のデスク裏から消えていた。

しかし居る。

この部屋だ。

「っ!？」

見つけた。

が、それは能力ではなく視界が捉えた、動体の発見だった。位置としてはこちらの右手側に。

出現は唐突と呼べる速さだ。

風切りの音さえ聞こえない無音のしなりを持ち、左の爪先がこちらの首を刈りに来る。

足。蹴り。

認識と行動を同時に、跳ねていた腕をそちら側に向ける。遅い。

放たれた蹴りが、弓なりの軌道で視界を裂いた。

・
・
・

霜見は身体のを突入の体勢に移行した。

目前、あと数歩の直近に目標とする部屋の扉がある。

下層からここまで、移動には数分と掛かっていない。エレベータ

―が動いた形跡も人が移動した気配も無い。

ならば扉の向こうには標的である能力者がまだ居る筈だ。

――こっちの動きにや、気付いてるだろうな。

考察と状況からの予測になるが、相手は追跡能力を持っている。
どこまでの範囲を、どれほど詳細に把握できるのか、それは分からない。

分からないが、

――近付いちまえば、関係ねーだろ。

目視距離ならば追跡能力は大きな有利にはならない。相手の位置を一方的に知れるからこそ強力な能力なのだから、互いの位置が知れている状況ではそのアドバンテージは失われて当然だ。

成程、と霜見は新たな納得を得た。

レベル5が追跡能力を手元に残したのは、能力者自身のアドバンテージを守る目的もあったのだと。

――レベル5、マルチタウナー原子崩しか。

冷静で判断力のある相手だ。

能力の強さ以前の問題として、やり合いたくない種類の人間である。

だから、霜見は行つた。

早々にこの研究所を去るために。

扉への距離が目前になり、さらに眼前へと変わり、霜見は力溜の息を一つ吐き出した。

「！」

突入する。

・
・
・

突入は、多人数多方向からの強襲が最も安全で効果的だ。

しかしそうで無い場合、こちらが一人で突入口も一つである場合には、必ず二段階の行程で行われる。

図だ。

何らかの図をまず、部屋に投げ込むのだ。

それは例えば、地下で金髪貧乳が使ったフラッシュグレネードだったり、ただの破片式グレネードだったり、捕まえた敵の仲間だったりするが、今の霜見が投げるのは左手で掴んでいたコンテナ片だった。コンテナ片は、地下でぶちかまし系絹旗が蹴りで破碎したのを拾ったものだ。五十センチ四方で重さは約二十キログラム。重力の調整で軽くして持って来たそれを手首のスナップで、

——行け！

投擲した。

投擲と同時に強重力波を纏わせたコンテナ片は、扉との接触で一トン近い破壊力を瞬間的に叩き出す計算だ。

激突する。

強固なアルミ合金の塊であるコンテナ片は、重力波による反作用で増幅した衝撃にも耐え、ばがんっ！という破碎の音を伴って部屋の中に飛び込んだ。

それとほぼ同時に、二連射の銃声が聞こえる。

軽めの炸裂音と連射速度を聞くに、小口径のオートマチック、女性用^{ディース}だろう。

よし、と霜見は心中に頷きを作った。

相手はこちらの囷に引つ掛かり、さらには不用意に銃を連射させている。

いくら女性の手に合うよう作られた小口径の銃だろうと、間断無い連射の反動を筋肉の薄い女の細腕で押さえ込むのは難しい。

ならば今は、

——照準がブレてる筈！

這うように体勢を低く、躊躇無い飛び込みで霜見は部屋へと踏み込んだ。

薄暗い部屋だった。

天井から落ちるばやけた非常灯だけを光源に陰影を作る部屋の中、霜見は動作を止めぬまま一瞬の視界を認識に取り込んだ。

部屋の広さ。障害物の有無。窓の位置。デスクの配置。

確認と行動を同時に、踏み込みの前方傾斜体勢から真横へと体重を移動させる最中、やや斜めの位置にあるデスクの影に人間の形を霜見は見る。

——あいつ……！

見覚えがある。

外で見た四人組の最後の一人だ。どうやら、予想した通りにあの集団がアイテムという名の組織で間違いない。

——しかもだ、気配も音も消してここまで近付いた筈なのに、しっかり待ち伏せされてるってのはどういう理由だ？

霜見は、推論に確信に近い感覚を得ていた。

彼女が、追跡能力者だと。

目指す標的が見え、やるべき事がはっきりとした。この薄暗い迷宮からの脱出も近いだろう。

なので霜見は脱出の足掛かりとして重心移動で傾いた体を横つ飛びに動かした。デスクの影の彼女は連射の反動で照準を乱しており、こちらを狙えない。

横にあったデスクの裏、彼女の死角になる部分に飛び込み、そのついでに置いてあった紙束を引っ掛けて宙に散らす。

粗末なめくらましのつもりだったが、

——あ、引っ掛かってる！可愛い！

少し狼狽気味に視線を奪われる彼女の姿は小動物をさながら連想させる。リス……いや、うさぎだろうか。うん、うさぎだな。バニーちゃんだ！

頷きを心中で強く繰り返しつつ、霜見は動きを次の動作へと連結した。

体勢は視線よりも低く、曲げた足のバネで跳ね上がるように、ただこちらを向かないバニーちゃんへと飛び込む。

その小柄なジャージ姿がこちらの間合いに入り、ようやく彼女は自分の接近に気が付いた。

銃身がこちらを向こうとし、しかしその速度はこちらが一步を踏み込むよりも遥かに遅い。

なので、霜見はそのまま踏み込んだ。同時、腕と腰とを連動させて回し、得られる加速で左の回し蹴りを打ち出す。

「！」

接敵した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467u/>

とある不確の超重力崩壊【ブラックホール】

2011年11月27日21時56分発行